

平安京左京三条三坊十三町跡・ 烏丸御池遺跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京三条三坊十三町跡・
烏丸御池遺跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



池876-1 滝200（北西から 1991年度調査）



1 池876-2検出状況（西から 1991年度調査）



2 池876-1 石敷き除去状況（東から 2016年度調査）



白地鉄絵山水図枕（78）（1991年度調査 池876埋土上層出土）



青磁牡丹唐草文深鉢（11）（1991年度調査 陸部202出土）

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をととして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、（仮称）新風館プロジェクトに伴う平安京跡・烏丸御池遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成29年3月

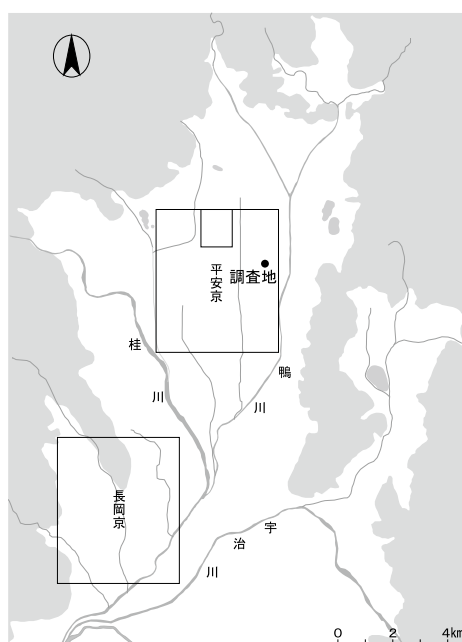
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | | |
|----|---------|---|
| 1 | 遺 跡 名 | 平安京跡・烏丸御池遺跡（文化財保護課番号 15 H 092） |
| 2 | 調査所在地 | 京都市中京区車屋町245－2他 |
| 3 | 委 託 者 | NTT都市開発株式会社 |
| 4 | 調 査 期 間 | 2016年8月22日～2016年10月14日 |
| 5 | 調 査 面 積 | 192㎡ |
| 6 | 調査担当者 | 松吉祐希・辻 裕司 |
| 7 | 使 用 地 図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」・「三条大橋」を参考にし、作成した。 |
| 8 | 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 | 使用 標 高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 | 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 | 遺 構 番 号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 | 遺 物 番 号 | 種類ごとに通し番号を付した。なお、土器・土製品類は番号のみ、瓦類は「瓦」、石製品は「石」、骨製品は「骨」を番号の前に付けた。写真番号も同一とした。 |
| 13 | 本 書 作 成 | 松吉祐希 |
| 14 | 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員が当たった。 |

（調査地点図）



目 次

1. 調査概要	1
(1) 調査の目的	1
(2) 発掘調査の経過	3
2. 調査地域	5
(1) 歴史的環境	5
(2) 周辺の調査	6
(3) 1991年度の調査概要	8
3. 遺 構	11
(1) 基本層序	11
(2) 遺構の概要	11
(3) 池876-1（古段階）	11
(4) 池876-2（新段階）	22
(5) 池876の石材鑑定	29
4. 遺 物	31
(1) 遺物の概要	31
(2) 土器類	31
(3) 瓦類	37
(4) その他の遺物	40
5. ま と め	42
(1) 室町時代の調査地	42
(2) 池876の変遷	43
(3) 邸宅の居住者	44

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 遺構 池 876-1 滝 200 (北西から 1991 年度調査)
- 巻頭図版 2 遺構 1 池 876-2 検出状況 (西から 1991 年度調査)
2 池 876-1 石敷き除去状況 (東から 2016 年度調査)
- 巻頭図版 3 遺物 白地鉄絵山水図枕 (78) (1991 年度調査 池 876 埋土上層出土)
- 巻頭図版 4 遺物 青磁牡丹唐草文深鉢 (11) (1991 年度調査 陸部 202 出土)

- 図版 1 遺構 1 池 876-2 再検出状況全景 1 (西から)
2 池 876-2 再検出状況全景 2 (南東から)
- 図版 2 遺構 1 池 876-2 陸部 202 再検出状況 (南東から)
2 池 876-2 遺水 201 再検出状況 (南東から)
3 池 876-2 陸部 202 基礎構造 (南西から)
- 図版 3 遺構 1 池 876-1 滝 200・枡状遺構 204 (北西から)
2 池 876-1 滝 200 石 30 断割断面 (北から)
3 池 876-1 滝 200 石 31 断割断面 (西から)
- 図版 4 遺構 1 池 876-1 泉 9 完掘状況 (北西から)
2 池 876-1 泉 9 検出状況 (西から)
3 池 876-1 泉 9 半截状況 (西から)
4 池 876-1 建物 1 (南から)
5 池 876-1 建物 1 石列 (北東から)
- 図版 5 遺構 池 876-2 全景 (西から 1991 年度調査)
- 図版 6 遺構 1 池 876-2 滝 200 (北から 1991 年度調査)
2 池 876-2 陸部 202 (北から 1991 年度調査)
1 池 876-2 埋鉢 203 断割状況 (北西から 1991 年度調査)
- 図版 7 遺物 出土土器
- 図版 8 遺物 出土土器
- 図版 9 遺物 出土土器・石製品・骨製品
- 図版 10 遺物 出土瓦類

挿 図 目 次

図 1	周辺調査地位置図（1：2,500）	1
図 2	調査区配置図（1：1,000）	2
図 3	調査前全景（東から）	4
図 4	重機掘削状況（東から）	4
図 5	真砂土による池跡の養生状況（東から）	4
図 6	土嚢による滝組の養生状況（北から）	4
図 7	作業風景（北西から）	4
図 8	滝組石の番号付け（北西から）	4
図 9	滝組石の取り上げ作業（北東から）	4
図 10	調査後全景（東から）	4
図 11	1991年度調査の基本層序	8
図 12	1991年度調査における各時代の遺構配置図（1：500）	9
図 13	2016年度調査の基本層序	11
図 14	調査区北壁断面図（1：80）	12
図 15	北壁断割調査時の西壁断面図（1：80）	13
図 16	池 876-1 実測図（1：60）	14
図 17	滝 200 実測図 1（1：40）	16
図 18	滝 200 実測図 2（1：40）	17
図 19	杵状遺構 204 実測図（1：20）	18
図 20	遣水 201 実測図（1：40）	19
図 21	泉 9 実測図（1：40）	19
図 22	建物 1 実測図（1：50）	20
図 23	建物 1 と石列、土坑 1・8 実測図（1：40）	21
図 24	池 876-2 実測図（1：60）	24
図 25	池 876-2 東部実測図（1：50）	26
図 26	池 876-2 東部景石、滝 200、遣水 201、陸部 202、埋鉢 203 断面図（1：40）	27
図 27	池 876-2 西部景石実測図（1：40）	28
図 28	滝 200・滝組基部の石材（1：40）	29
図 29	遣水 201・景石の石材（1：80）	30
図 30	池 876-2 造成土、滝 200、泉 9、陸部 202、土坑 1・8 出土土器実測図（1：4）	32
図 31	池 876 埋土下層出土土器実測図（1：4）	33
図 32	池 876 埋土中層・上層出土土器実測図（1：4）	34

図33	白地鉄絵山水図枕実測図（1：4）	35
図34	堀708・758・833出土土器実測図（1：4）	36
図35	軒丸瓦拓影及び実測図（1：4）	38
図36	軒丸瓦・軒平瓦拓影及び実測図（1：4）	39
図37	石製品・骨製品実測図（1：2）	41
図38	四行八門の想定線と調査区の位置（1：500）	42
図39	池876の推定復元図（1：300）	43
図40	池876-1復元イラスト	44

表 目 次

表1	周辺調査の主な検出遺構	7
表2	遺構概要表	11
表3	池876に用いられた石材	29
表4	遺物概要表	31

平安京左京三条三坊十三町跡・烏丸御池遺跡

1. 調査概要

(1) 調査の目的 (図1)

本調査は、(仮称)新風館プロジェクトに伴う発掘調査である。調査地は、京都市中京区車屋町245-2他に所在し、平安京左京三条三坊十三町跡及び烏丸御池遺跡にあたる。

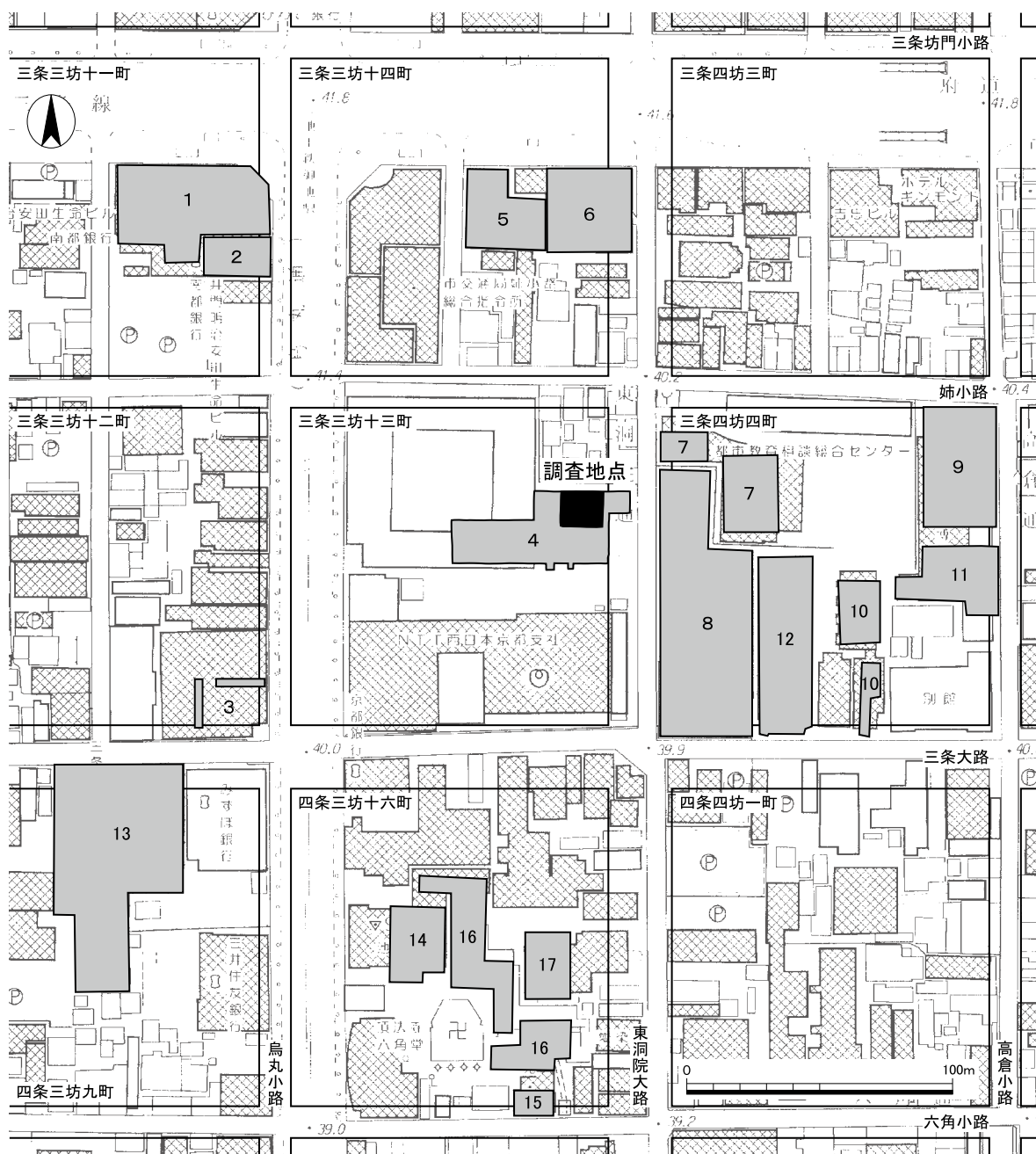


図1 周辺調査地位置図 (1 : 2,500)

本調査地では、1991年度に発掘調査が実施されている。1991年度の調査面積は約1300㎡で、平安時代の井戸、室町時代の池・堀・井戸・柱穴など、江戸時代の後藤庄三郎邸跡とみられる建物・池・井戸などを検出した。調査終了後、室町時代の池については保存のため真砂土の入った土嚢と真砂土を用いて養生し、埋め戻した。調査地周辺の調査でも、縄文・弥生時代の流路や平安・鎌倉・室町・江戸時代の遺構を多数確認している。

今回、(仮称)新風館プロジェクトとして当該地に新たな建物の建築が計画されたことから、1991年度に埋め戻し保存していた池を再発掘し、池に組まれていた滝を移築することとなった。今回の調査では、この池の構造及びその下層の遺構・遺物の確認を目的とした。

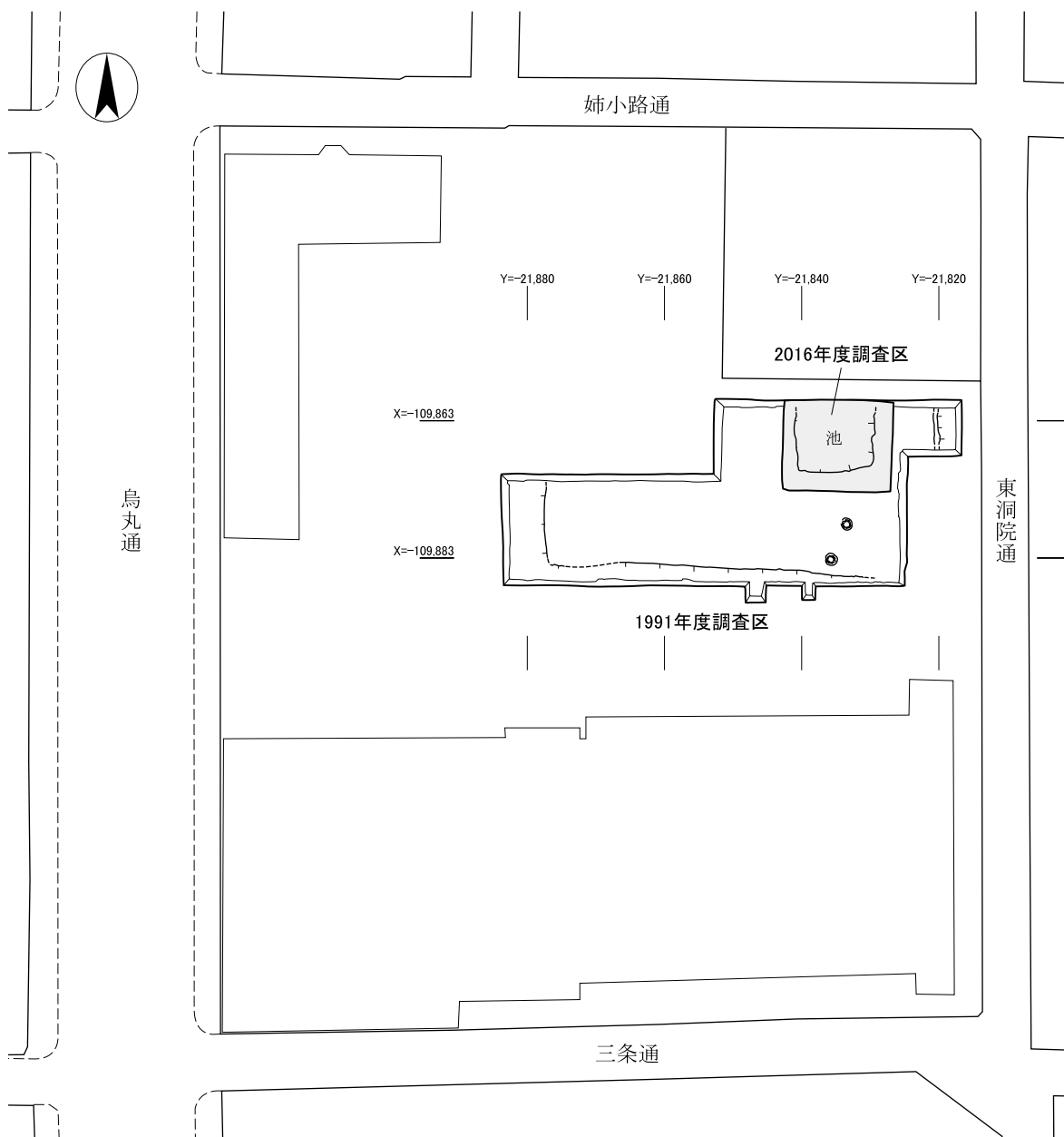


図2 調査区配置図 (1:1,000)

（２）発掘調査の経過（図２～１０）

調査区は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導により東西16m、南北12mに設定した。調査面積は192㎡で、調査期間は平成28年8月22日から10月14日である。

調査では、1991年度の埋め戻し土を重機を用いて掘削し、池の保存のために養生した真砂土と土嚢は人力で除去した。土嚢や埋め戻し土を全て除去した後、9月6日に全景写真と滝や遣水の個別写真の撮影及びオルソ測量を行った。

その後、池の底石を外し、池の造成土を掘削したところ、古段階の池を確認した。古段階の池の南西部で石列を、滝の前面で木枠を検出したため、9月16日にそれらの個別写真を撮影した。9月21日に池に付属する滝・遣水・泉・池の底石の一部について石材鑑定¹⁾を行った。9月27日に古段階の池の全景写真、泉の個別写真を撮影した。

写真撮影後、池の掘形を完掘するために、古段階の池の造成土を掘削し始めた。10月4日より、移築予定である滝の石組み及び景石について、個々の石材に番号を付し、国土座標のX・Y軸や標高のラインを入れるなどの作業を行った。この作業に伴い、滝組の断ち割り調査を行った。10月7日より、滝の石組や景石をクレーンを用いて取り上げた。10月12日に、古段階の池掘形の完掘状況を写真撮影した。10月13日より、重機・ダンプによる埋め戻しを行った。補足調査として、調査区の北壁法面を重機により一部掘削し、前回の調査で検出できていなかった古段階の池の北肩や新段階の池の石敷きを確認した。この際、新段階の池の造成土の土壌サンプルを採取した。10月14日に、埋め戻しを終了し、すべての調査を完了した。

なお、調査で検出した遺構はすべて人力で掘削し、検出した遺構や土層断面については平面図や立面図、土層断面図を作成し、写真撮影などの記録作業を行った。

註

- 1) 石材鑑定は、橋本清一氏に依頼した。



図3 調査前全景（東から）



図4 重機掘削状況（東から）



図5 真砂土による池跡の養生状況（東から）



図6 土嚢による滝組の養生状況（北から）



図7 作業風景（北西から）



図8 滝組石の番号付け（北西から）



図9 滝組石の取り上げ作業（北東から）



図10 調査後全景（東から）

2. 調査地域

(1) 歴史的環境 (図1)

調査地は、縄文時代晩期から飛鳥時代にかけての集落跡である烏丸御池遺跡に位置する。

延暦13年(794)に長岡京から平安京へ都が遷ると、調査地周辺は平安京域となる。調査地は北を姉小路、南を三条大路、東を東洞院大路、西を烏丸小路に囲まれた平安京左京三条三坊十三町にあたる。

まず文献史料の記述から、平安時代以降の調査地周辺の様相を以下に記す。

平安時代後期、調査地の位置する平安京左京三条三坊十三町は、藤原済家や加賀守藤原家通の邸宅が存在していた(『拾芥抄』)。その後、大治元年(1126)に白河法皇の院御所としてこの地に三条東殿が完成する。三条東殿は法皇の崩御後、待賢門院藤原璋子、鳥羽上皇に受け継がれた。三条東殿は度重なる火災による焼亡の後、後白河天皇の御所として復興するも、平治元年(1159)に兵を挙げた源義朝の夜襲により焼亡したことが『平家物語』や『平時物語絵巻』に記されている。

調査地は平安時代後期以降、貴族の邸宅や院宮として利用されてきたが、調査地周辺も同様であった。調査地の北西にある三条三坊十一町には平安時代後期に備中守高階為清の邸宅(『山槐記』)、調査地の西隣にある十二町には白河法皇、鳥羽上皇、待賢門院藤原璋子らの御所である三条西殿¹⁾、調査地の北東にある三条四坊三町には在原業平の邸宅(『無名抄』)、調査地の東隣にある三条四坊四町には後白河天皇皇子の以仁王の邸宅である高倉宮、以仁王の死後は同地に右近衛中将藤原成定邸や大膳大夫平業忠邸など(『明月記』建保元年(1213)正月15日条)、調査地の南西にある四条三坊九町には平安時代後期に三条烏丸殿、三条烏丸御所、三条棧敷殿などの三条南殿の存在が知られている(『中右記』天永3年(1112)12月19日条など)。また調査地の南にある四条三坊十六町には、10世紀後半に六角堂が創建された²⁾。

鎌倉時代になると、調査地である平安京左京三条三坊十三町は、七条院藤原殖子の御所となるも、承久3年(1221)に焼失した(『百練抄』承久3年2月10日条)。

室町時代の本調査地の土地利用についての史料は、確認できていない。ただし調査地周辺では、14世紀後半に三条高倉に斯波孝経邸が営まれたようである(『師守記』貞治4年(1365)4月26日条)。また調査地北方の三条坊門小路以北には足利尊氏邸や弟の足利直義邸、尊氏嫡子の義詮邸も存在していたことから(『太平記』、『師守記』など)、調査地周辺は武家の邸宅地であったと考えられる。また、平安時代に以仁王の高倉宮が存在した三条四坊四町には14世紀末に瑞雲山通玄寺曇華院が創建された。通玄寺曇華院はその後、焼亡と再建を繰り返しながら、明治5年(1872)に嵯峨野へ移転するまでの約500年間、この地に営まれた。調査地の西隣の左京三条三坊十二町には14世紀末に綿商人、15世紀前半に酒屋が存在したようである³⁾。また16世紀後半に描かれた上杉家本『洛中洛外図屏風』によると、同地周辺に商店が並んでおり、その中に周囲とは一線を画した邸宅も存在したことが確認できる。

室町時代の調査地周辺は、貴族の邸宅地から武家の邸宅地となり、また商人達も集まってきたことから、商業地域としても発展したようである。

江戸時代になると、室町時代からの商業地がさらに隆盛を極める。調査地周辺に金座や銀座などが置かれたことから、両替商が集住した。調査地も金座の当主である後藤庄三郎が屋敷を構えていたことがわかっている（『京雀』巻2）。

（2）周辺の調査（図1、表1）

つぎに考古学的な調査成果から、今回の調査地周辺の様相を以下に記す。なお、1991年度に行われたNo.4の調査成果については次項で説明する。

先述の通り、調査地周辺は烏丸御池遺跡に位置しており、No.16では縄文時代の流路を検出している。またNo.8・12でも縄文土器が出土した。

弥生時代から奈良時代にかけての顕著な遺構は調査地周辺では確認していない。

平安時代前期・中期に属する遺構も少ないが、No.5で平安時代中期の溝を検出し、No.13では平安時代中期から後期の寝殿造りの一画と考えられる建物と渡殿、島を伴う池や景石を配す庭園を検出している。この寝殿造りの邸宅は藤原実能邸と考えられている。

平安時代後期以降では、平安時代後期の溝、井戸、土坑、ピット（No.2・3・7・16・17）や、平安時代後期から鎌倉時代の井戸、土坑（No.9・15）、平安時代後期から室町時代前半の六角堂の北限区画溝となる東西溝（No.14）など、遺構の数は増加する。条坊関係の遺構としては、烏丸小路の西側溝（No.1・2）、東洞院大路の東築地跡（No.7）、東洞院大路東側溝（No.8）、高倉小路西側溝（No.9・11）、三条大路北側溝（No.3・12）を検出している。なお、No.1では平安時代と考えられる門跡を検出した。上述のように平安時代後期の遺構は増加するものの、これらの遺構は後世の削平により残存状況が良好でないため、院宮や貴族邸宅の様相を復元することは難しい。

鎌倉時代についても溝、井戸、土坑、柱穴、堀（No.2・5・7・16）、鎌倉時代から安土桃山時代の溝、井戸、柱穴、建物、石組遺構（No.3・6）などの各種遺構を検出しているが、平安時代と同様に全体的な様相を把握することは困難である。

室町時代の遺構としては溝、井戸、土坑、石列を検出している（No.2・5・7・10・15・16）ほか、No.5やNo.7では堀が確認される。No.5で検出された堀SD212は1町の中心にあたり、後述するNo.4で検出した堀833の北の延長上に位置することから、同一の堀と考えられる。またNo.7では室町時代後半に東洞院大路に沿って開削された堀を確認しているが、この堀は曇華院の寺域防衛の役割を果たしたとされる。六角堂関係の遺構としては、室町時代後期の六角堂東限を画した堀や東門跡（No.17）が確認されている。また六角堂の東限の区画溝以東では、室町時代後期の土坑墓を検出した（No.16）。No.1でも、集石墓や土坑墓など、埋葬された人骨約80体を検出しており、室町時代から安土桃山時代まで墓域であったことが明らかとなっている。条坊関係の遺構では、No.6で室町時代後期の東洞院大路西側溝及び路面を検出している。このように室町時代になると、各所で居住域や墓域の形成がみられ、さらに室町時代後期には寺域や邸宅を囲む堀が開削されている。

表1 周辺調査の主な検出遺構

No.	位置	平安時代以前	平安時代	鎌倉時代	室町時代	条坊関係	出典
1	三条三坊十一町		門		集石墓・土坑墓	烏丸小路西側溝	①
2	三条三坊十一町		井戸	溝	井戸	烏丸小路西側溝	②
3	三条三坊十二町		後期の井戸・土坑	鎌倉～安土桃山の井戸・柱穴・建物・石組遺構		三条大路北側溝	③
4	三条三坊十三町		井戸		井戸・池・土坑・柱穴・堀	東洞院大路路面・西側溝	④
5	三条三坊十四町		中期の溝	溝・土坑・柱穴・堀	井戸・土坑・堀		⑤
6	三条三坊十四町			鎌倉～室町の溝・井戸、室町後期の堀		東洞院大路路面・西側溝	⑥
7	三条四坊四町		後期の井戸	井戸	溝・井戸・土坑・堀	東洞院大路東築地	⑦
8	三条四坊四町					東洞院大路東側溝	⑧
9	三条四坊四町		平安後期～鎌倉の井戸			高倉小路西側溝	⑨
10	三条四坊四町				井戸・土坑		⑩
11	三条四坊四町					高倉小路西側溝	⑪
12	三条四坊四町					三条大路北側溝	⑫
13	四条三坊九町		中期～後期の建物・池など				⑬
14	四条三坊十六町		平安～室町の溝・土坑				⑭
15	四条三坊十六町		平安末～鎌倉の土坑		土坑		⑮
16	四条三坊十六町	縄文の流路	後期の井戸・溝・土坑	土坑	溝・井戸・土坑・石列・土坑墓		⑯
17	四条三坊十六町		後期の井戸・ピット		堀・門		⑰

- ①『平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告 第14輯 財団法人古代学協会 1984年
- ②「平安京左京三条三坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- ③『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告 第7輯 財団法人古代学協会 1983年
- ④「平安京左京三条三坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- ⑤「平安京左京三条三坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- ⑥「左京三条三坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- ⑦『平安京左京三条四坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- ⑧『東洞院大路・曇華院跡』平安京跡研究調査報告 第3輯 財団法人古代学協会 1977年
- ⑨『平安京高倉宮・曇華院の発掘調査』財団法人古代学協会 1979年
- ⑩『平安京高倉宮・曇華院跡』平安京跡研究調査報告 第8輯 財団法人古代学協会 1983年
- ⑪『平安京高倉宮・曇華院跡第4次調査』平安京跡研究調査報告 第18輯 財団法人古代学協会 1987年
- ⑫『平安京左京三条四坊四町 京都市中央区曇華院前ノ町』京都文化博物館(仮称)調査研究報告 第2集 財団法人京都文化財団 1988年
- ⑬「平安京左京四条三坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- ⑭『平安京六角堂の発掘調査』平安京跡研究調査報告 第2輯 財団法人古代学協会 1977年
- ⑮『平安京六角堂跡第2次発掘調査概報』財団法人古代学協会 1980年
- ⑯『六角堂第3次・第4次調査』平安京跡研究調査報告 第21輯 財団法人古代学協会 2006年
- ⑰「平安京左京四条三坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年

(3) 1991年度の調査概要

前述のように、今回の調査は1991年度に実施した平安京左京三条三坊十三町の調査の一部の再調査である。1991年度の調査では、平安時代後期から鎌倉時代、室町時代中期から末期、江戸時代前期の遺構を検出した。以下に、前回調査の報告及び当時の図面などの記録を参照し、調査概要を記す。なお、今年度の調査に係る室町時代については詳しく記述する。

基本層序 (図11)

1991年度の調査では、現地表面(標高41.20m)から約1.1mまでは、近現代の建物基礎や盛土が広がっており、その下層で、江戸時代中期以降の整地層(標高40.10m、第Ⅰ層)、江戸時代中期の整地層(標高38.70m、第Ⅱ層)、江戸時代前期の整地層(標高37.95m、第Ⅲ層)、室町時代の整地層(標高37.70m、第Ⅳ層)、標高37.45m以下で基盤層(黄褐色粘土層・砂礫層)を確認している。

1991年度の調査では、第Ⅰ層上面で江戸時代末期、第Ⅱ層上面で江戸時代中期、第Ⅲ層上面で江戸時代前期、第Ⅳ層上面で室町時代中期から後期、基盤層上面で平安時代の遺構面をそれぞれ確認している。

平安時代前期から鎌倉時代の遺構 (図12)

井戸4基や土坑を検出した。このうち平安時代後期の井戸544直下では平安時代前期の井戸を確認した。このことから、平安時代前期にも本来は遺構が存在していたと考えられる。

室町時代中期から末期の遺構 (図12)

東洞院大路の路面とその西側溝、堀、溝、池、井戸、土坑、柱穴などを検出した。

東洞院大路 調査区東端で東洞院大路の路面905を検出した。道路面は、4面検出した。時代が下るとともに路面の幅が狭くなることから、宅地が徐々に道路を侵食していったことが判明した。検出した道路幅は、後述の堀684が路面上に存在するため、1.8～2.5mほどであった。

堀684 調査区東端で南北方向の堀の西肩を検出した。この堀は東洞院大路の路面を掘削して作られた。

堀708 調査区南端で東西方向の堀を検出した。堀758と同一の堀である。

堀758 調査区南端で東西方向の堀の北肩を検出した。堀833と調査区南端で合流する。

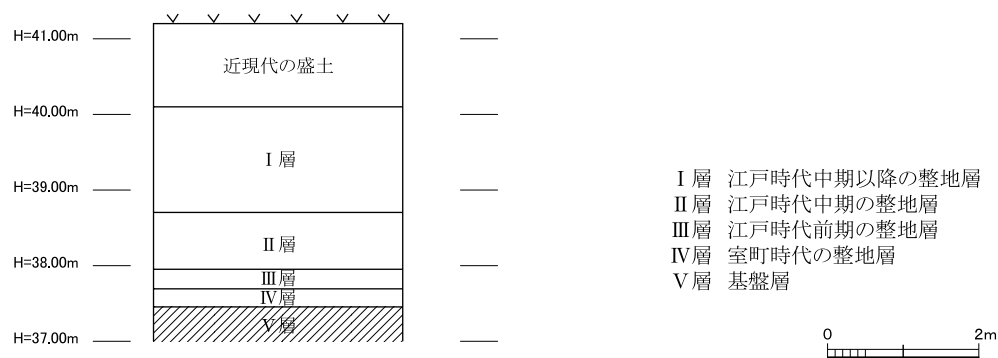


図11 1991年度調査の基本層序

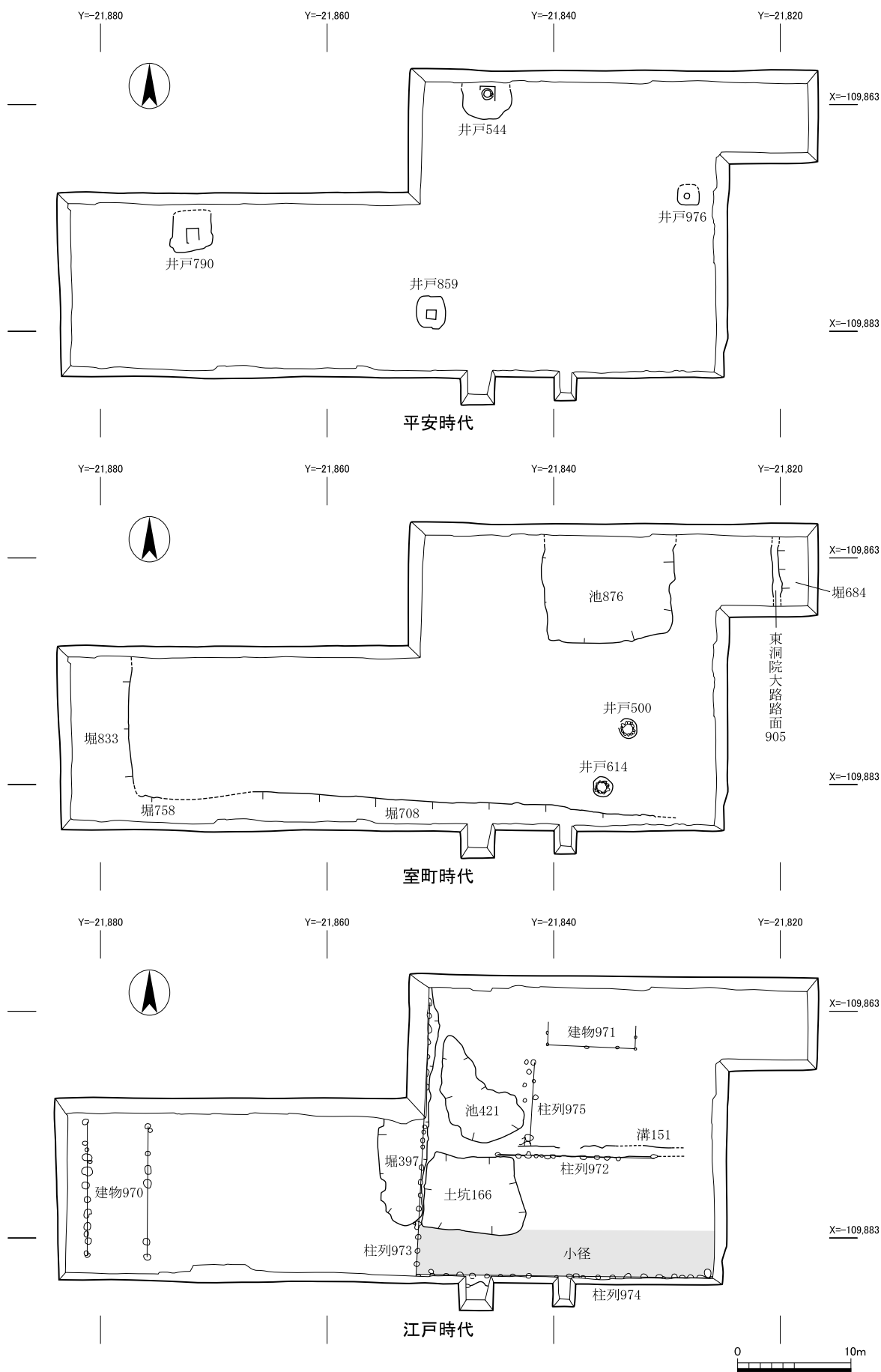


図12 1991年度調査における各時代の遺構配置図（1：500）

堀833 調査区西端で南北方向の堀の東肩を検出した。検出面での規模は、幅約6m、深さ約1.5mである。

これらの堀は出土遺物から、16世紀代に機能し、16世紀後半には埋没すると考えられるが、詳細な開削時期は不明である。護岸施設は確認していない。これらの3つの堀（堀684、708・758、833）は邸宅などの防御施設の一部と想定でき、堀で囲まれた宅地の一辺は約60mとなる。

池876 調査区北東部で池を検出した。池の北肩は調査区外に位置するが、平面形は方形を呈すると考えられる。

この池876は、調査後に保存のために埋め戻された。今年度の再発掘により、新たに明らかになった点も多いため、1991年度の調査成果も含めて「3. 遺構」の章で詳述する。

江戸時代前期の遺構（図12）

建物970・971、柱列972・973・974・975、池421、堀397、小径、土坑166を検出した。土坑166からは、大量の国産陶磁器などの土器類や木製品が出土した。

寛永期の『洛中絵図』には後藤庄三郎邸が記されている。この絵図によると、後藤邸は姉小路に面しており、調査区は後藤邸の敷地の南半部にあたる。柱列973が後藤家敷地の西端境界をあたると考えられ、調査区東側で検出した建物や土坑、調査区中央で検出した池・堀・土坑が後藤邸に関連する遺構とみられる。

註

- 1) 龍谷 寿「文献学的考察」『三条西殿跡』平安京跡研究調査報告 第7輯 財団法人古代学協会 1983年
- 2) 龍谷 寿「文献よりみた六角堂」『平安京六角堂の発掘調査』平安京跡研究調査報告 第2輯 財団法人古代学協会 1977年
- 3) 註1に同じ
- 4) 「平安京左京三条三坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図13・14)

現地表面から約2.5mまでは江戸時代から近現代の盛土及び整地層（上面標高41.00m）を調査区全体で確認した。これは1991年度調査の基本層序の近現代の盛土・第Ⅰ層・第Ⅱ層・第Ⅲ層にあたるが、今回は調査対象としていない。調査区西端では、その下層に室町時代の整地層（上面標高38.40m、第Ⅳ層）と、整地層の下に基盤層（上面標高37.90m、第Ⅴ層）を確認した。調査区東端では、Ⅱ層の下で基盤層（上面標高38.50m、第Ⅴ層）を確認した。今年度の調査は、第Ⅳ層以下で行った。

(2) 遺構の概要 (表2)

今回の調査では、室町時代の池876を再検出した。1991年度の調査では、池876に関連する遺構として、滝・遣水・景石・陸部などを確認している。

今回の再調査では、1991年に検出した池876の下層を調査したことにより、池876に新旧2時期があることが明らかとなった。ここでは古段階の池を池876-1、新段階を池876-2と呼称する。1991年度に検出した池876はおおむね新段階の池876-2にあたる。

(3) 池876-1 (古段階) (図15・16、巻頭図版2)

池は、基盤層を方形に掘り込んで造成された。東西幅は約12mで、南北幅は北岸が調査区外のため不明であるが、西辺長は約8.9m、東辺長は約7.7mである。池の深さは約1.4mで、池の底面には基盤層の上に厚さ約0.1mの礫を含む砂質土を敷き固めていた。

東西南北の4つの岸のうち、西岸については、南端から約1m以北が後世の削平により失われて

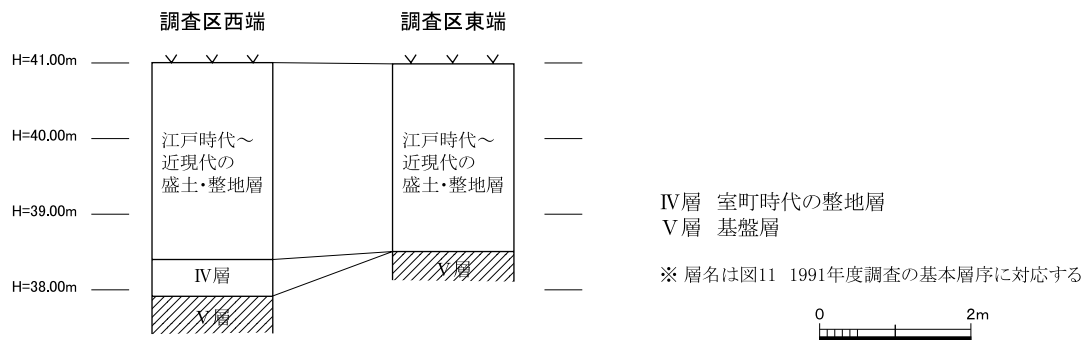


図13 2016年度調査の基本層序

表2 遺構概要表

時 代	遺 構
室町時代	池、滝、陸部、遣水、泉、建物、土坑

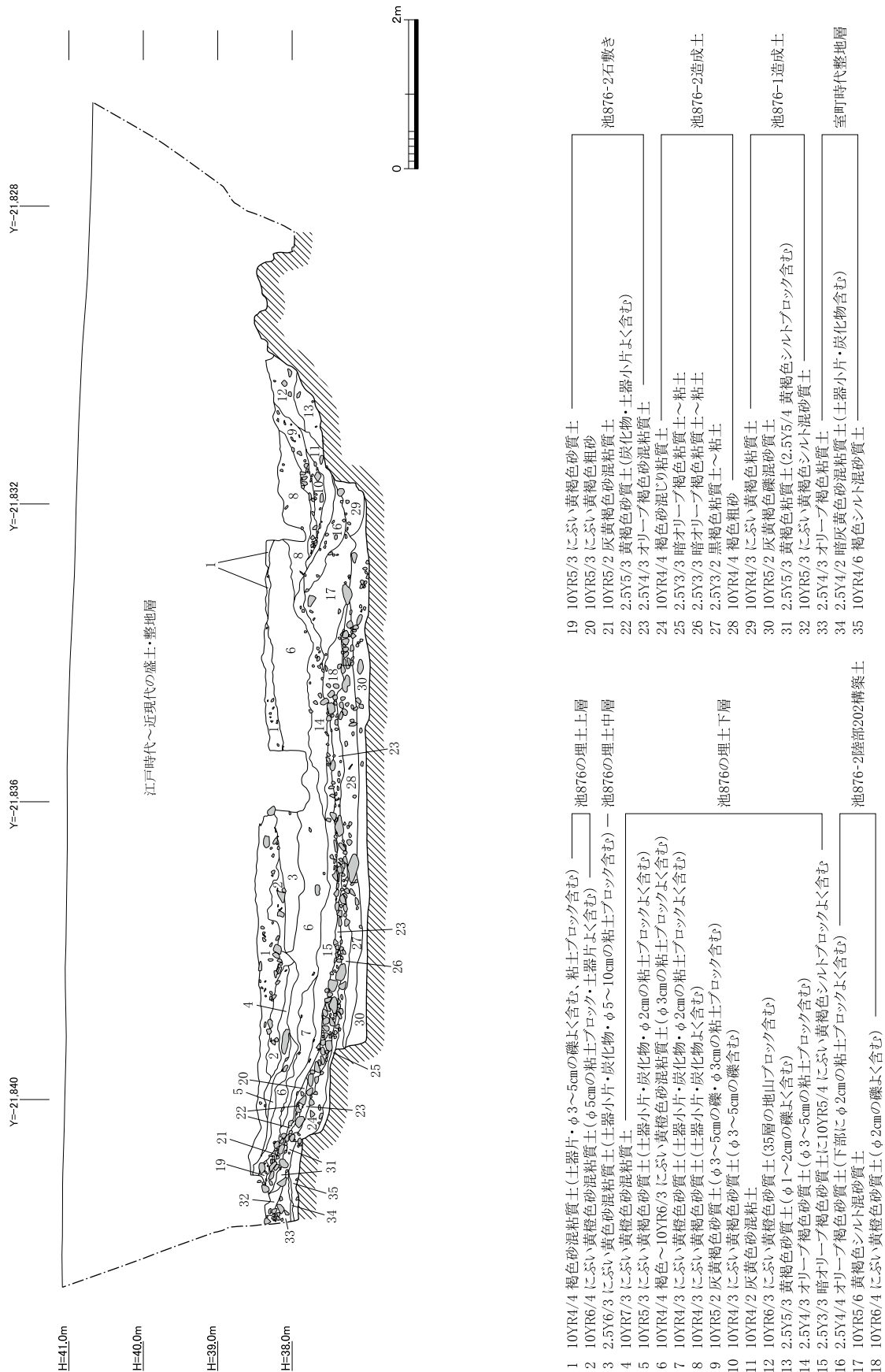


図14 調査区北壁断面図 (1 : 80)

いたが、3段の階段状を呈していたことが確認できた。以下では、池底より一つ上の段を「下段平坦面」、その上の段を「上段平坦面」、そして最上段を「岸上面」と呼び、3つの斜面はそれぞれ「下段斜面」・「中段斜面」・「上段斜面」として、岸の状況を述べる。池底は標高37.0～37.1mで、底面から高さ0.4mの下段斜面があり、それに続く下段平坦面は、北半部で幅1m、南半部では幅3～4mとなり、砂質土を固く締めテラス面（標高37.4m）をつくっていた。そして、下段平坦面より高さ0.5～0.6mの中段斜面を上がると、幅0.7～0.8mの上段平坦面がある。さらに、上段平坦面より高さ0.3mの上段斜面があり、西岸上面に至る。

北岸は調査区の法面となっていたため、全体の調査はできなかったが、一部で断ち割り調査を行い、西岸と同様の段状を呈す状況を確認した。北岸でも西岸と同様に、池底から高さ0.4mの下段斜面があり、その上に幅0.7mの下段平坦面が設けられていた。さらに下段平坦面より高さ0.4mの中段斜面があり、幅0.7～0.8mの上段平坦面が設けられた。上段平坦面から立ち上がる上段斜面及び北岸上面は、調査区外となるため、今回の調査では確認できなかった。仮に、上段斜面が西岸と同じ高さと同角度であったとして、北岸上面の位置を復元すると、池の南北幅は10.2～10.3mとなる。

南岸は、西岸とのコーナー部分で岸上段と上段斜面及び上段平坦面を一部確認できたものの、中央部については現代の攪乱のため検出できなかった。南岸の東部には滝が存在しており、西岸でみられたような階段状の掘り込みはみられなかった。なお、池の東岸では西岸のような階段状の掘り込みは確認できず、岸上面から池底までが一続きの斜面となっていた。

また、池876-1には、滝・岬・遣水・泉・景石が設けられ、西岸では付属建物を伴う建物を検出した。以下、それぞれについて詳述する。

滝200（図17～19、巻頭図版1、図版3） 池の南東隅で石組みの滝200を再検出した。滝200は下部の石積みの基礎（以下、滝組基部とする）と、その上の4つの石からなる滝組（石30・31・46・72）とで構成される。

滝組基部は、基盤層を掘り込んだ斜面に砂や粘質土・粘土を互層に盛土し、その上面に20cmほどの石を積んで形成されている。また、鏡石となる石30の前面直下には、石の貼られていない箇所があった。意図的に石を貼っていない可能性が高い。この滝組基部を基礎とし、その上に鏡石（石30）を置き、鏡石の前面に3石の滝添石（石31・46・72）を配置していた。

滝組は、石30・31の背面に掘形を掘り、砂礫・粘土・粘質土などを互層に積んでいた。そして滝組基部を作り、最後に石30・31が据えられた。その際、石の背面や下面には、石を据える位置を調整したとみられる粘土を貼り付けていた。石46・72は、石の背面に粘土や粘質土を互層にし

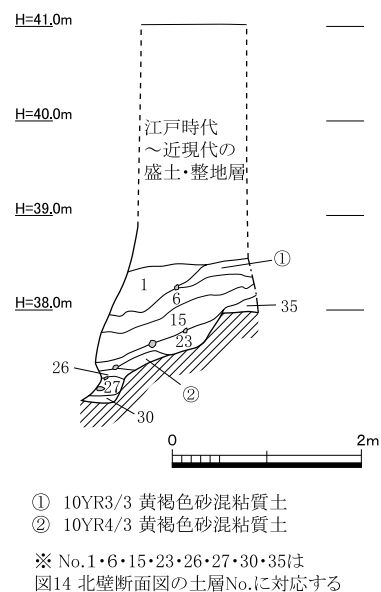


図15 北壁断割調査時の西壁断面図
(1:80)

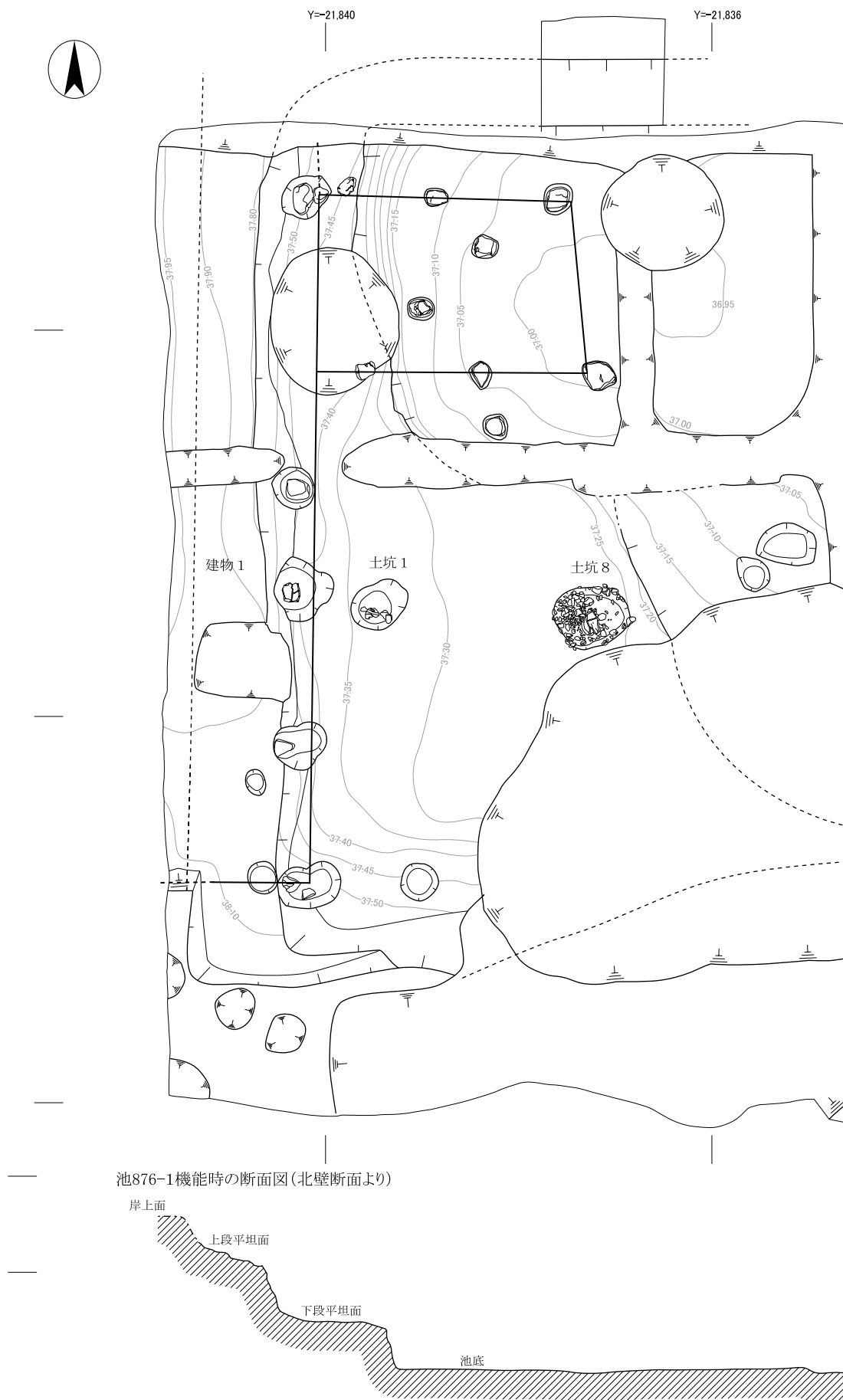


図16 池876-1実測図 (1 : 60)

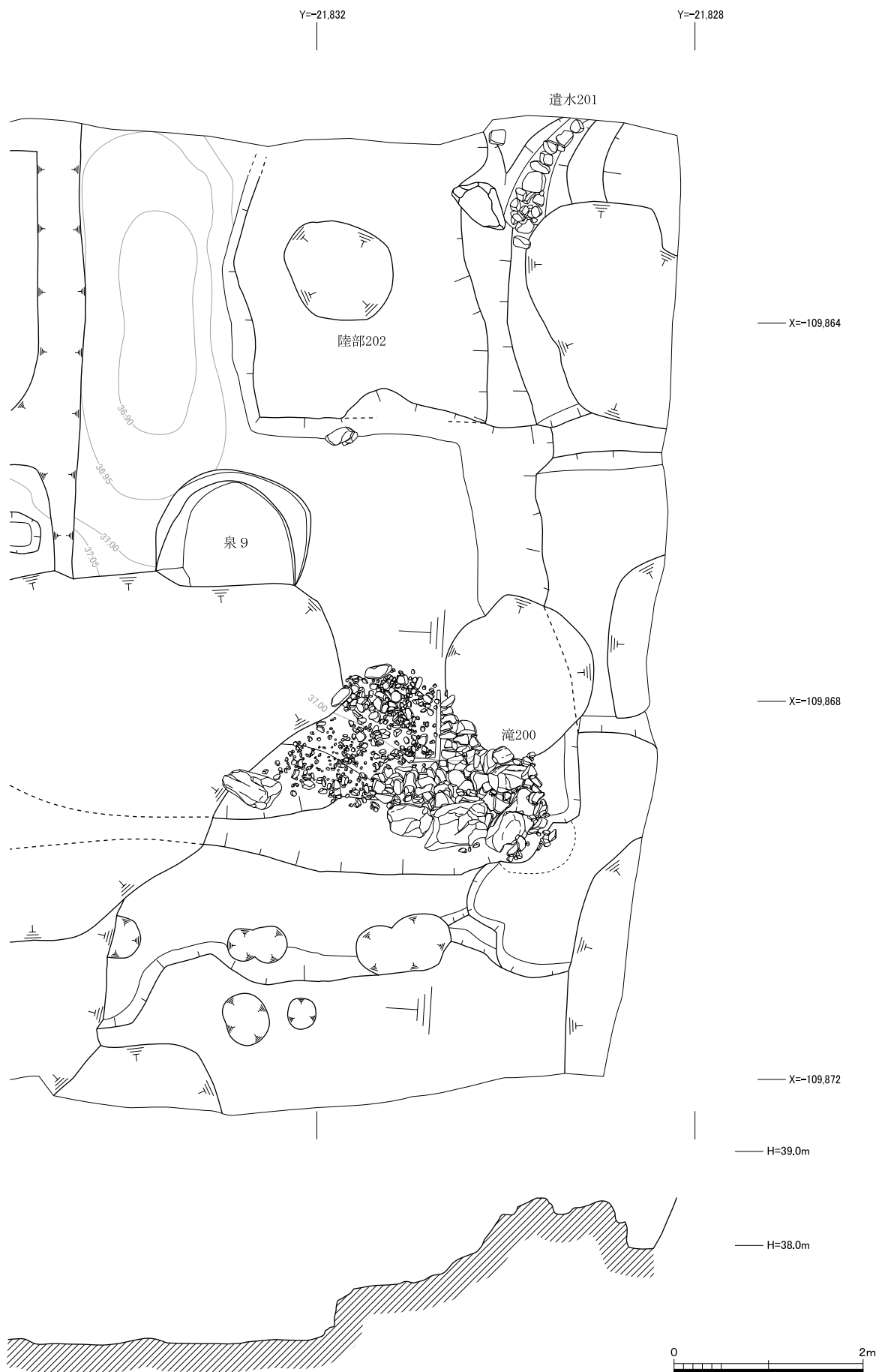




図17 滝200実測図1 (1 : 40)

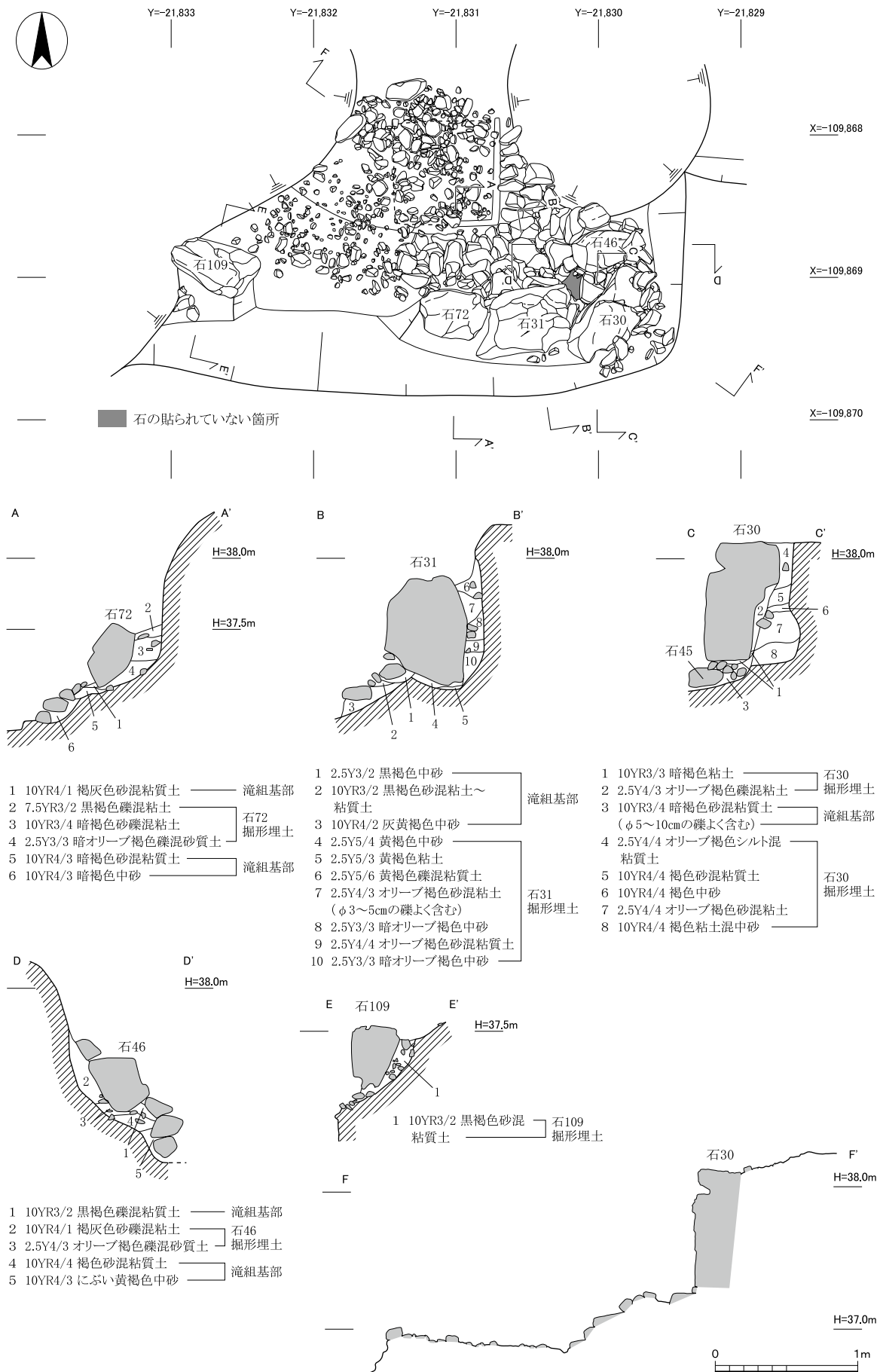


図18 滝200実測図2 (1:40)

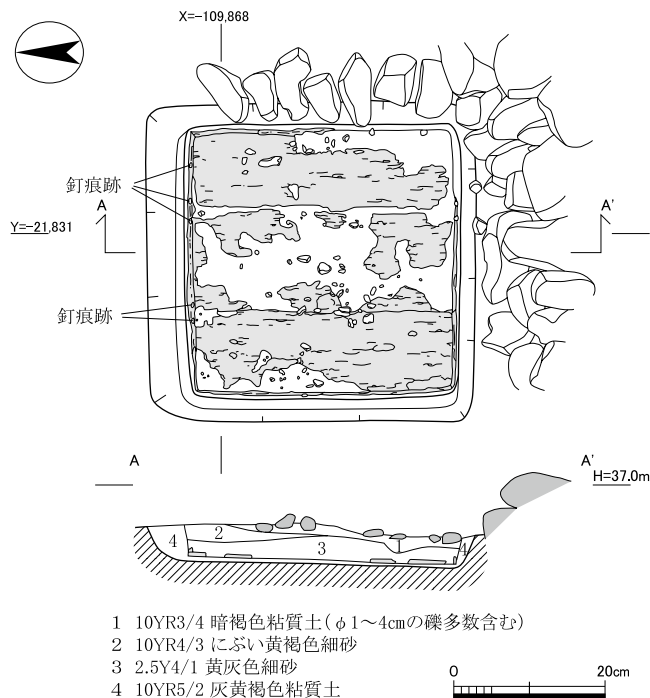


図19 柵状遺構204実測図（1：20）

の平坦面は北西方向にやや傾斜していることから、水は平坦面の北西から石の側面へと流れ出ることとなる。水が石30の前面を通るためには、石30の北西側に石を置くなどの工夫をして水流の向きを変える必要があるが、そのような痕跡は確認できなかった。また滝の前面直下に存在する石の貼られていない箇所や滝の石組みには、石材表面の磨耗や裏込めの削れなどの水が流れた痕跡を確認できなかった。また、この滝の取水に関連する溝や掛樋などの遺構及びそれに伴う遺物も認められなかった。

また滝の前面にあたる池の底面には、一辺約70cm、残存高4cm（本来は約6cmと推定）の正方形の木箱がほぼ正方位の位置で設置されていた（柵状遺構204、図版3）。柵状遺構の材質はマツまたはコウヤマキである。底板には、幅20cm・27cm・21cmの板3枚を用いていた。側板はほとんどが腐敗していたが、側板接合のために鉄釘のうたれた周辺のみが鉄さびとともに残存していた。この柵状遺構204の内部は、粘質土で埋まっており、その上には石が敷かれていた。ただし、滝組基部の石積みは、この柵状遺構204の東辺・南辺を基準として敷かれていた。

なお、この滝に用いられた石材については、後述する。

陸部202 池の北東隅で方形に張り出す陸部202を検出した。陸部202は基盤層を掘り残し、その上に土を盛って造られていたと考えられる。陸部202の盛土は、検出時には石111の東側と陸部202の中央の一部にしか残存していなかったが、北壁断面の観察などから、築造当初は陸部202全体に盛土がなされていたと推測する。陸部202の形状は、やや東西に長い方形で、東西幅は2.9mである。北側は、調査区外となるため確認できていないが、おそらく北岸に接続するとみられ、南北幅は推定で約3mである。陸部202には北部に石111が置かれ、北東隅に遣水201が設けられていた。石111及び新段階に設置されたとみられる石112については、池876新段階の項にて詳述する。

て裏込めとしていた。

石30は高さ80cm、幅75cmのチャートで、石30上面と池底の比高差は約1.2mである。石30の前面は平坦であるが、石の中央部に横方向の割れ目が2本確認でき、水の流れを変化させるための意匠とみられる。この石30は、前面を北西に向けて据えられていることから、滝は北西方向を正面としたようである。

この滝における水の流れについて以下に述べる。鏡石となる石30の上面には段差があり、1段目と2段目の比高差は約20cmである。水は、この2段目の平坦面から落ちるとみられるが、こ

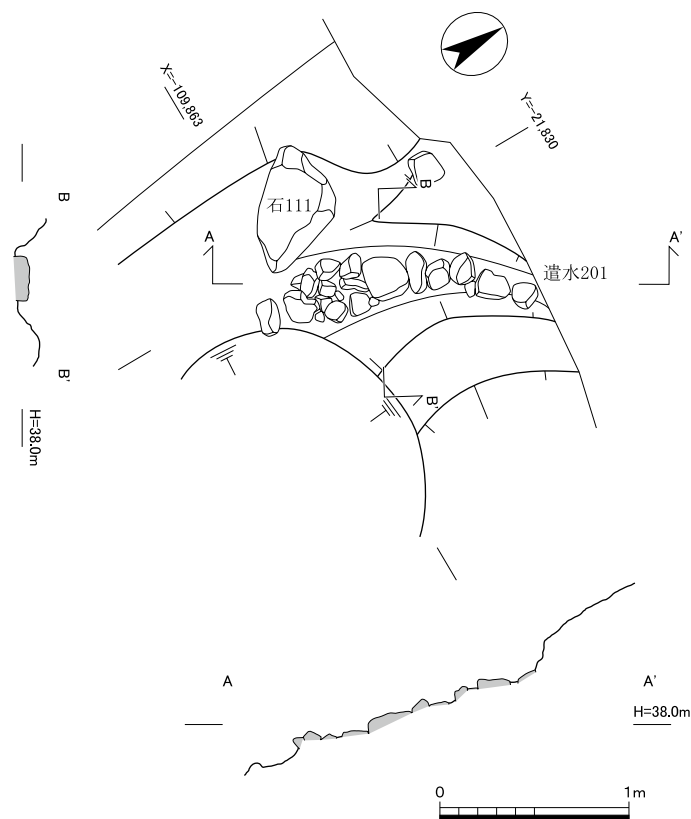


図20 遣水201実測図 (1:40)

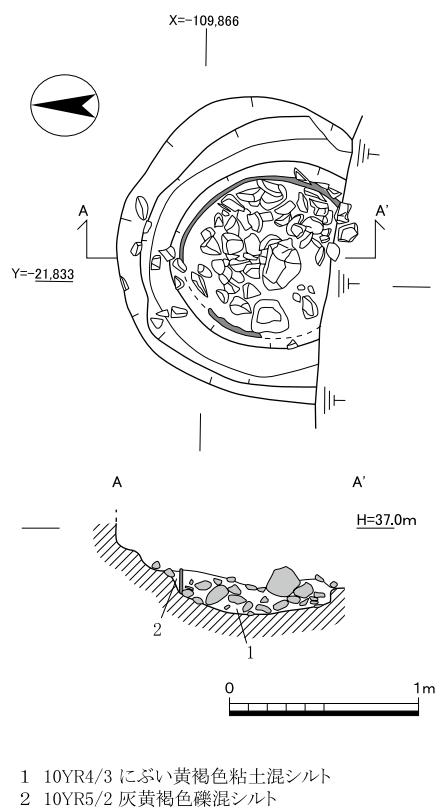


図21 泉9実測図 (1:40)

遣水201 (図20、図版2) 池の北東隅で遣水とみられる石組溝を検出した。溝の長さは1.5m、上端幅約0.5mで、深さ0.3mである。この溝はシルトの基盤層を掘削しており、北東から南西方向に傾斜していた。溝の底面に粘質土を置き、両側には平坦面を上にした20～40cmの石を並べていた。標高の高い北東部には30～40cmほどの石を、標高の低い南西部にはやや小さい20～30cmほどの石が用いられていた。溝の両肩の護岸はなく、溝底でも堆積層などの水が流れた痕跡は確認できなかった。なお、遣水201は池876-2の段階まで存在したと考えられる。

泉9 (図21、図版4) 池の中央で土坑を検出した。掘形は直径1.6mで円形を呈し、深さは約0.5mであった。土坑の底には直径90cm、高さ約16cmの木製曲物が据えられ、曲物の内側には拳大の石が充填されていた。曲物の材質はスギである。曲物内からは土師器皿が出土した。土坑の底面は標高36.55mで、1991年度に検出した同時期の井戸の底面の標高と同じかそれより低い。このことから、この土坑の底からは水が湧いていたとみられる。

建物1 (図22・23、図版4) 池の西岸の階段状掘り込みの下段平坦面上で、南北方向の柱穴5基(柱穴13・14・15・19・31)を検出した。柱の掘形は40～80cmの円形を呈し、柱間は1.1～1.5mで、底部には15～30cmの根石をそれぞれにもつ。この南北柱列は西側に展開する建物東側の縁の柱列と推察する。

さらに柱穴13・14・15・31と一部重複する位置から、柱穴(柱穴2・3・4・32)を検出した。柱掘形は30～40cmで、柱間は1.5mである。柱穴32のみで根石を確認した。これらの柱穴は、重複関係から柱穴13・14・15・31よりも新しいことが確認できるため、ほぼ同位置で建物の建て替え

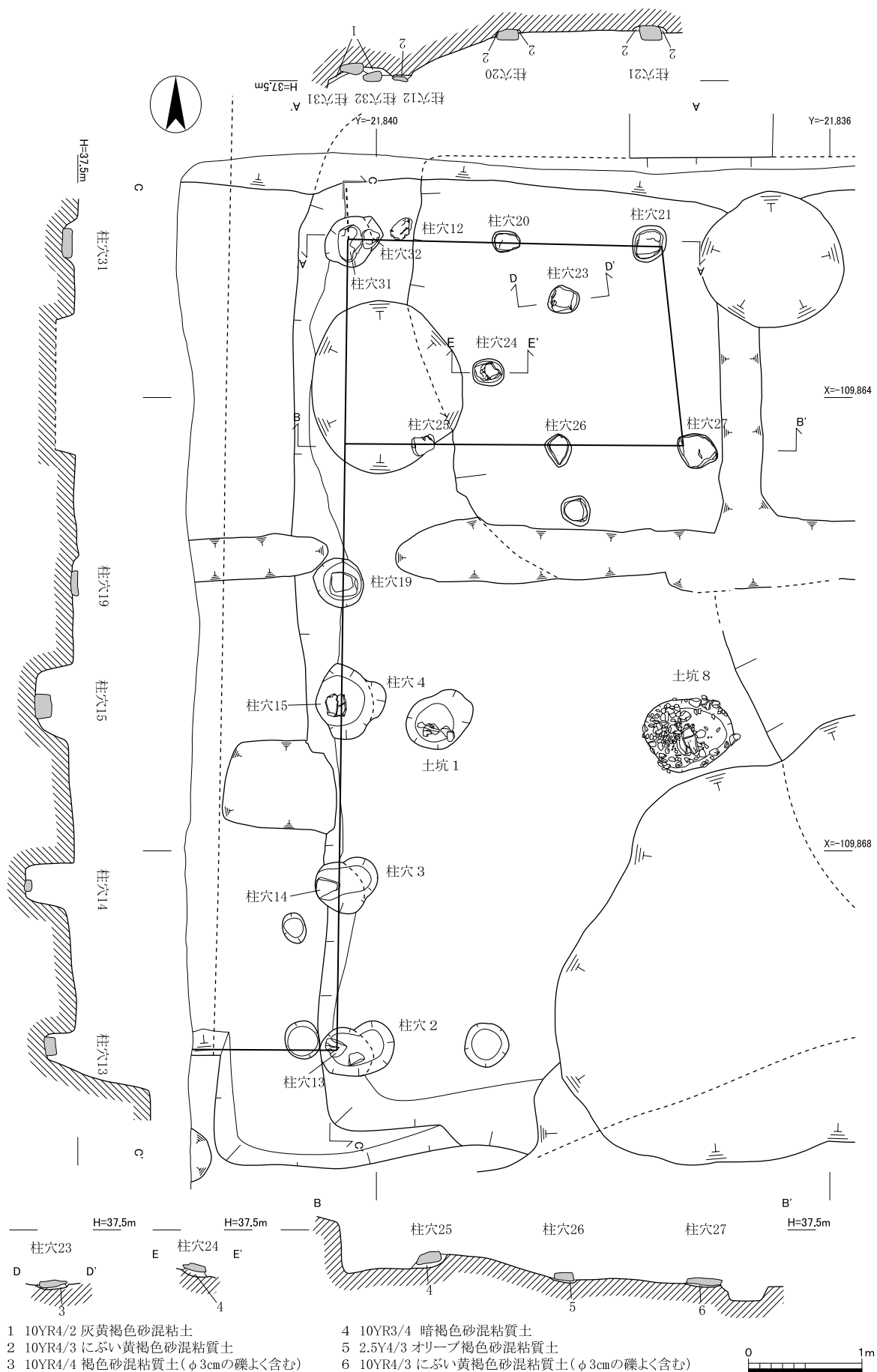


図22 建物1実測図 (1:50)

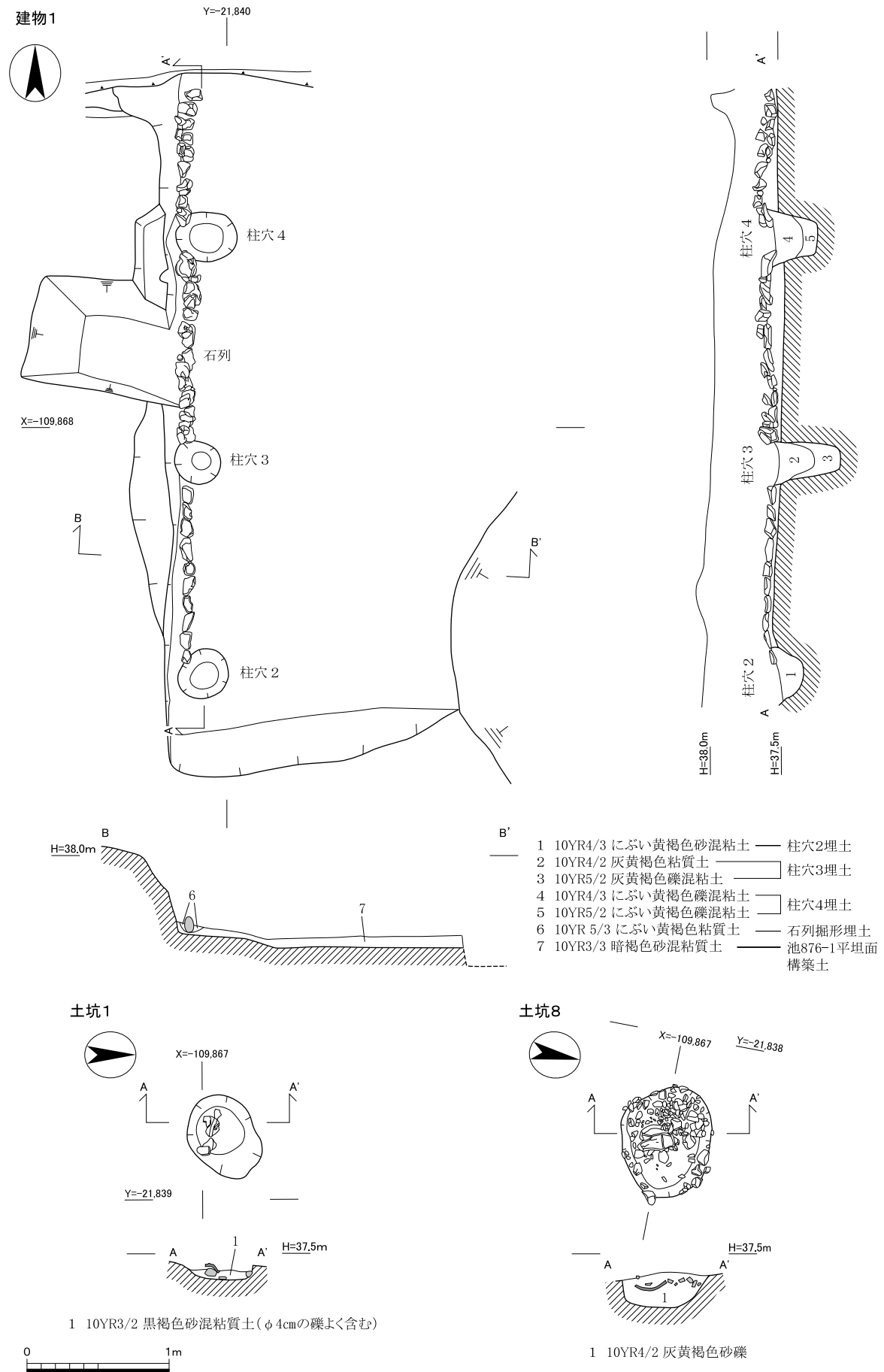


図23 建物1と石列、土坑1・8実測図(1:40)

が行われたと推測できる。また、この柱列の南側にあたる柱穴2～4に沿って、10～15cmほどの石が南北1列に据えられていた。これらは石の平坦面が西側を向くように揃えて並べられていた。柱穴2～4は、これらの石列とは一直線上に位置するが、柱穴部分には石を確認しておらず、また石列が乱れた状況も認められなかった。このことから、この石列は柱穴2～4に柱が立てられた後に並べられた、柱穴2～4に伴う石列と考えられる。

建物1の北西部で礎石を8基（柱穴12・20・21・23～27）検出した。これは建物1から東側の池上へ張り出した付属施設の礎石と考えられる。この付属施設の南北の側柱の礎石（柱穴12・20・21・25～27）は、池底をやや掘り窪めて据えられ、粘質土で埋め戻されている。建物の東石となる礎石（柱穴23・24）は池底に粘質土を置き、その上に据えてられていた。柱間は東西1～1.2m、南北1.9mである。この付属施設は、建物の新旧両段階に伴っていたとみられる。

上述した石列は柱穴2～4からなる建物1の縁の床下の化粧列石とみられる。柱穴2～4以北は建物1付属施設が存在するため、石列による化粧が不必要であったと推測できる。

土坑1（図23） 池の南西部の下段平坦面上で検出した。南北50cm、東西60cmの東西にやや長い楕円形を呈し、深さは10cmである。埋土には、直径1cmほどの小礫が多く含まれており、瓦質土器の火鉢や土師器片が出土した。

土坑8（図23） 池の南西部の下段平坦面上で検出した。東西約80cm、南北約60cmの東西に長い楕円形を呈し、深さは約30cmである。埋土には、直径1～5cmの小礫が多く含まれており、瓦質土器の火鉢や土師器片が出土した。

（4）池876-2（新段階）（図24・25、巻頭図版2、図版1）

池876-1を改修した池で、1991年度の調査で検出した池はこの段階のものである。

池の形状は方形で、規模・掘り込み範囲は池876-1と同じである。北壁断面の土層からは、改修に際し、池876-1の西岸の下段平坦面に土を積み、池の底面全体及び汀に粘質土を入れて、その上に拳大の石を敷いている状況が明らかとなった。この改修により、池876-2の西岸は、南半が非常に緩やかな傾斜をもち、北半が南半よりやや急角度の傾斜をもつ岸となる。北岸については、西岸北半と同様の形状と考えられる。一方、南・東岸は、西・北岸より角度の急な斜面で、池底まで垂直に落ちる。

また、池876-1から池876-2への改修に伴い、陸部202の改修、建物1の廃絶、池中及び滝200前面における景石の設置が行われている。以下、改修された滝200・陸部202・景石について詳述する。

滝200（図25・26、図版6） 滝の大きな改変はなかったようで、石組みは改修後も踏襲されたとみられる。ただし、池876-2への改修に伴い、滝前面にも砂質土や粘質土が10～20cm敷かれ、その上面に10～40cmの大きさの石が置かれた。これにより、古段階の滝組基部の一部や底面の石敷きは埋没した。

陸部202（図25・26、図版2・6） 新段階の陸部202では、方形を呈した古段階の陸部202の

北西部に礫や土を入れて、拡張が行われている。ただし、この拡張のための盛土の一部は1991年度の調査で一部掘り下げられていた。

古段階の陸部202の西辺で、東西幅約0.6mの範囲に敷かれた10～20cmほどの礫を南北約2.5m分検出した。この礫は新段階の陸部202を造成するために入れた土留め用の石と考えられ、礫の上に砂質土などを盛土し、陸部を大きくしていた。また、陸部202の西側には、長さ75cm、直径5cmの丸太材が陸部の西辺とほぼ平行に据えられていた。新段階の陸部202を造成する際の基底部の目印と考えられる。この丸太材は腐敗しており、上半部は空洞になっていた。

また陸部202の南西部では、南北約80cm、東西約50cmの範囲で花崗岩質の粗い白砂を確認していることから、本来は陸部202の表面には全面に白砂が敷かれていたとみられる。さらに、陸部202の西部には青磁の鉢と石が、陸部202の構築土を掘削して共に据えられていた（埋鉢203）。青磁の鉢は底部に円孔が穿たれていることから、植木鉢として使用したと推測する。また鉢とともに設置された石は緑泥片岩とみられる。

この他、陸部202の改修により、古段階から存在したと考えられる遣水201・石111に加え、陸部202北側に石112、陸部202南辺に石110が据えられた。石111は基盤層を掘削し、粘質土を入れて据えられている。陸部には石111の他に、石112が据えられていたが、この石112は小礫を多く含んだ砂質土（陸部202の構築土と推測）の上に据えられている（図25）。これら2つの景石は据え方が異なることから、設置時期が異なる可能性がある。石112は底面に掘り込みを持たずに据えられており、後述する新段階の景石と据え方に共通点がみられることから、新段階に設置されたと考えられる。石111はそれ以前の段階、すなわち池876-1の造営時に据えられたと推測する。ただし、石の据え方の違いは石の設置場所の違いに起因したものであるならば、石111が新段階に設置された景石となる可能性もある。なお、陸部202の北東部にある遣水201は、陸部202の盛土の状況から、石111を設置した後に造られていたことを確認した。

景石（図25～27） 池876-2には、池の様々な場所に景石が配置された。景石が新たに置かれた場所は、滝の西側（石109）、滝200と陸部202の間（石102～105・110）、陸部202の西側（石113・114）、池の北西部（石106～108・118）、池の南西部（石115～117）、池の中央（石120）である。石116と石117は底面を掘り込んで石を据えるが、それ以外の景石は掘り込みを持たずに、池底の石敷き層の上に石を据えていた。また、陸部202の石112は池876-2に伴うと考えられる。石111は上述のように池876-1の段階としたが、池改修時に設置された可能性もある。



图24 池876-2实测图 (1 : 60)



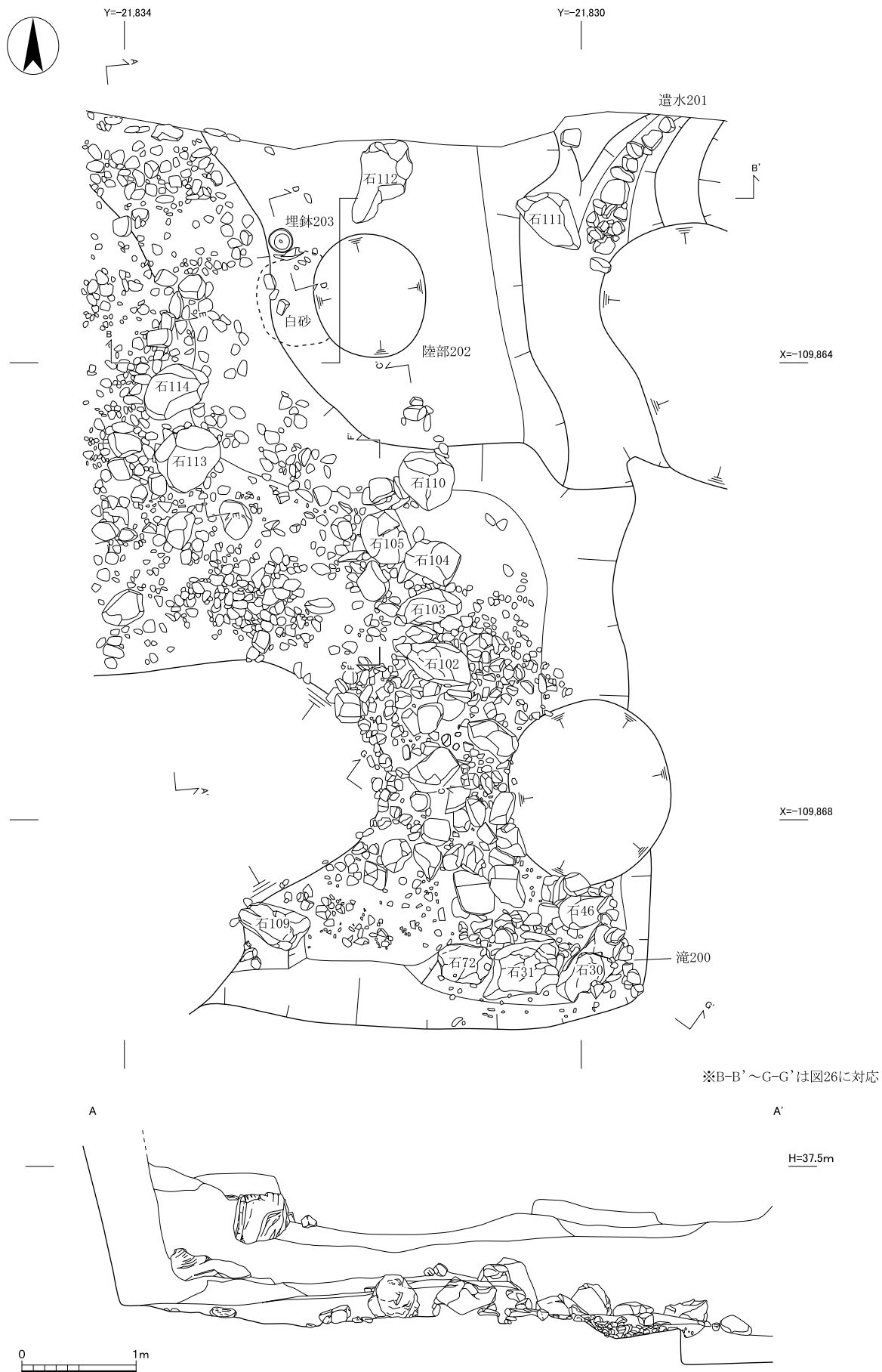


図25 池876-2東部実測図 (1 : 50)

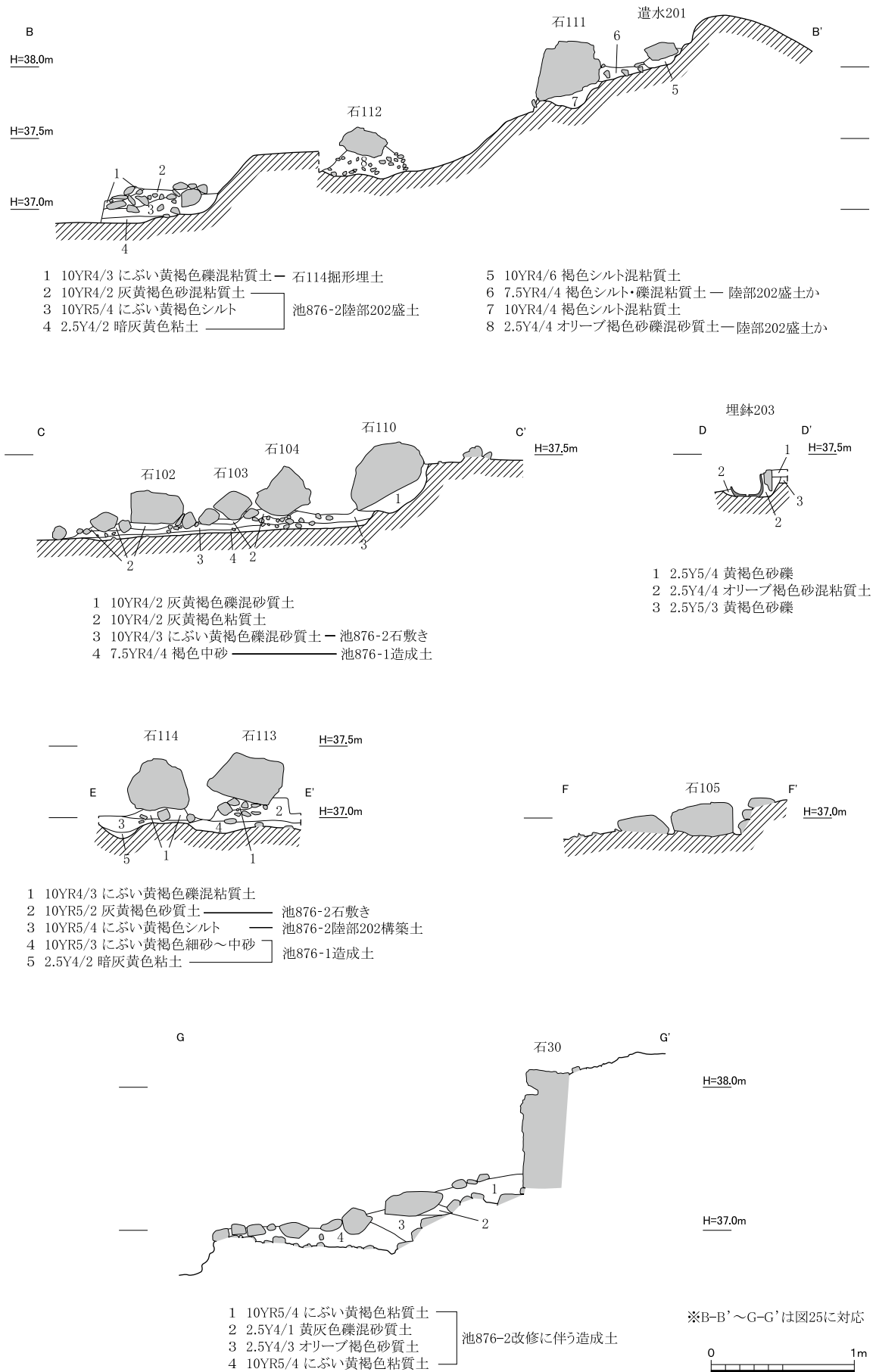
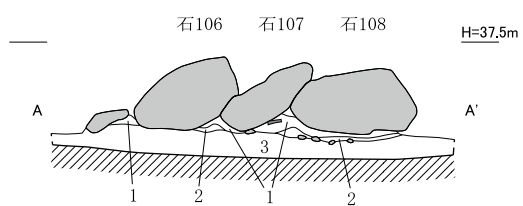
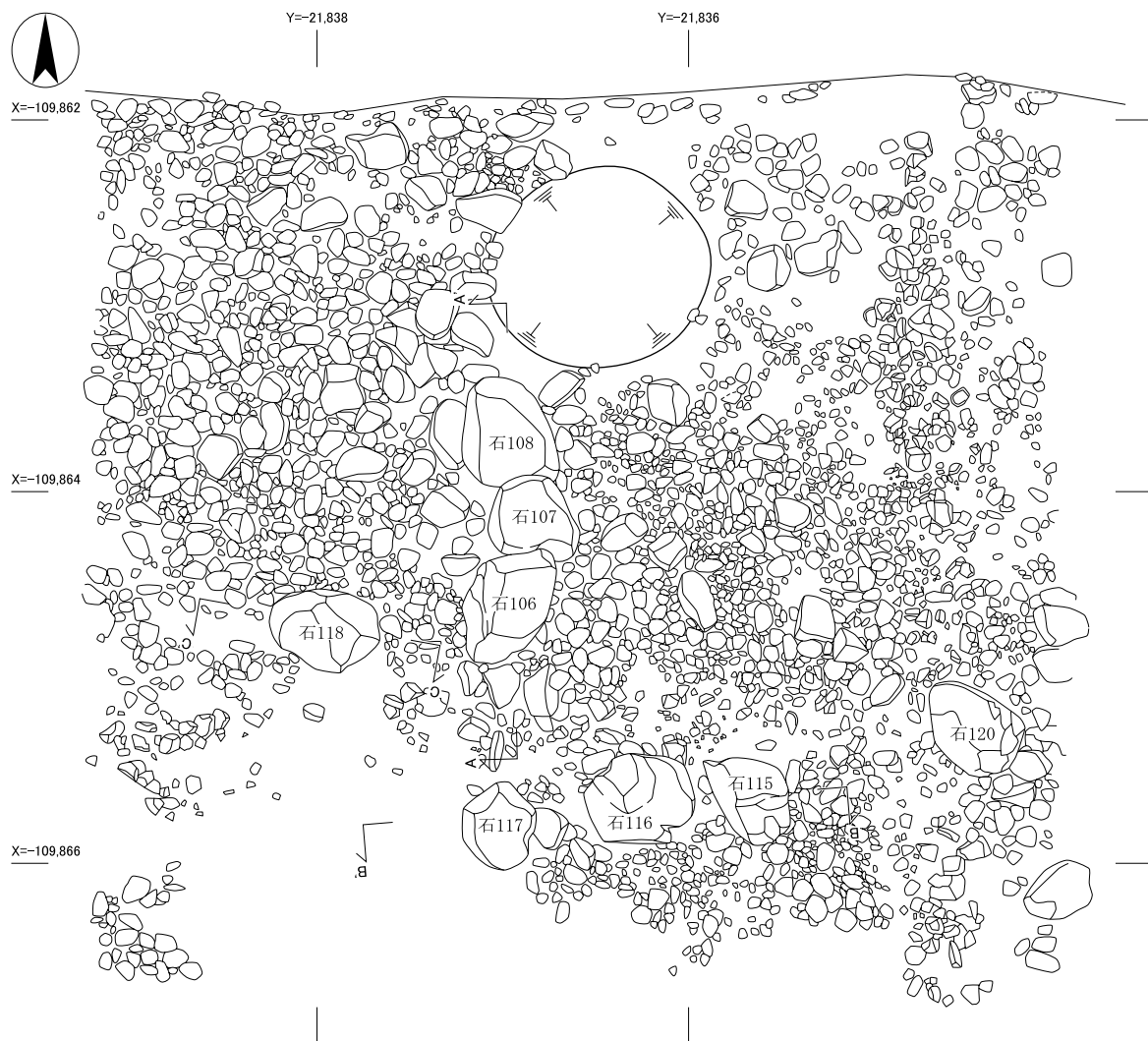
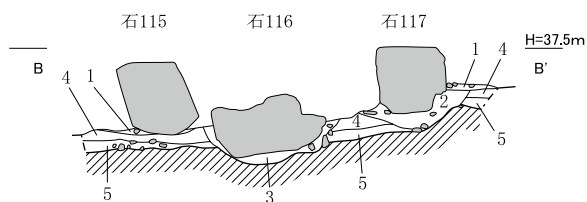


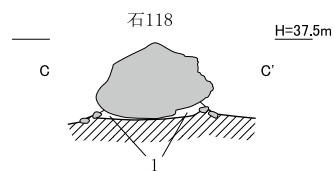
図26 池876-2東部景石、滝200、遺水201、陸部202、埋鉢203断面図（1：40）



- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘土
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂——池876-2石敷き
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫混粘質土—池876-1造成土



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色礫混粘質土—池876-2石敷き
- 2 2.5Y4/6 オリーブ褐色礫混粘土
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色礫混粘質土
- 4 10YR5/6 黄褐色中砂
- 5 10YR3/3 暗褐色粘土混砂礫——池876-1造成土



- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色礫混粘土—池876-2石敷き



図27 池876-2西部景石実測図（1：40）

(5) 池876の石材鑑定（図28・29、表3）

1991年度及び今年度の調査で検出した池876の石材鑑定を橋本清一氏に依頼した。石材鑑定は、池876-1の滝200と滝組基部、遣水201、池876-2の泉9、景石、石敷きの一部で行った。滝200と滝組基部、遣水201、景石はそれぞれの石に番号を付した。泉9については、泉の直上に敷かれた池876-2の石敷きを、池の石敷きについては、①池中央部一帯（約1.6m四方）、②池の南西岸（約東西1m×南北2m四方）に敷かれた石を任意に抽出して石材の種類を鑑定した。石材鑑定の成果は以下の表のとおりである。

池876には主に砂岩、チャート、ホルンフェルス、玢岩、花崗閃緑岩、アプライト、頁岩などの石材が用いられた。各遺構に用いられた石材は以下の通りである。

滝200に用いられた石材は、鏡石がチャート1、滝添石が玢岩1、脈石英1、砂岩1であった。滝組基部は、砂岩25、チャート15、ホルンフェルス12、玢岩2、花崗閃緑岩2、アプライト2、珩岩1で



図28 滝200・滝組基部の石材（1：40）

表3 池876に用いられた石材

石材	滝組	滝組基部	遣水201	泉9	景石	石敷き①	石敷き②	計
砂岩	1	25	6	6	5	11	9	63
チャート	1	15	6	5	3	8	1	39
ホルンフェルス		12		8	2	4	1	27
玢岩	1	2			1	1		5
花崗閃緑岩		2		2				4
アプライト		2				1	1	4
頁岩					4			4
花崗岩					1	2		3
珩岩		1						1
脈石英	1		3					4
斑糲岩							1	1
計	4	59	15	21	16	27	13	155

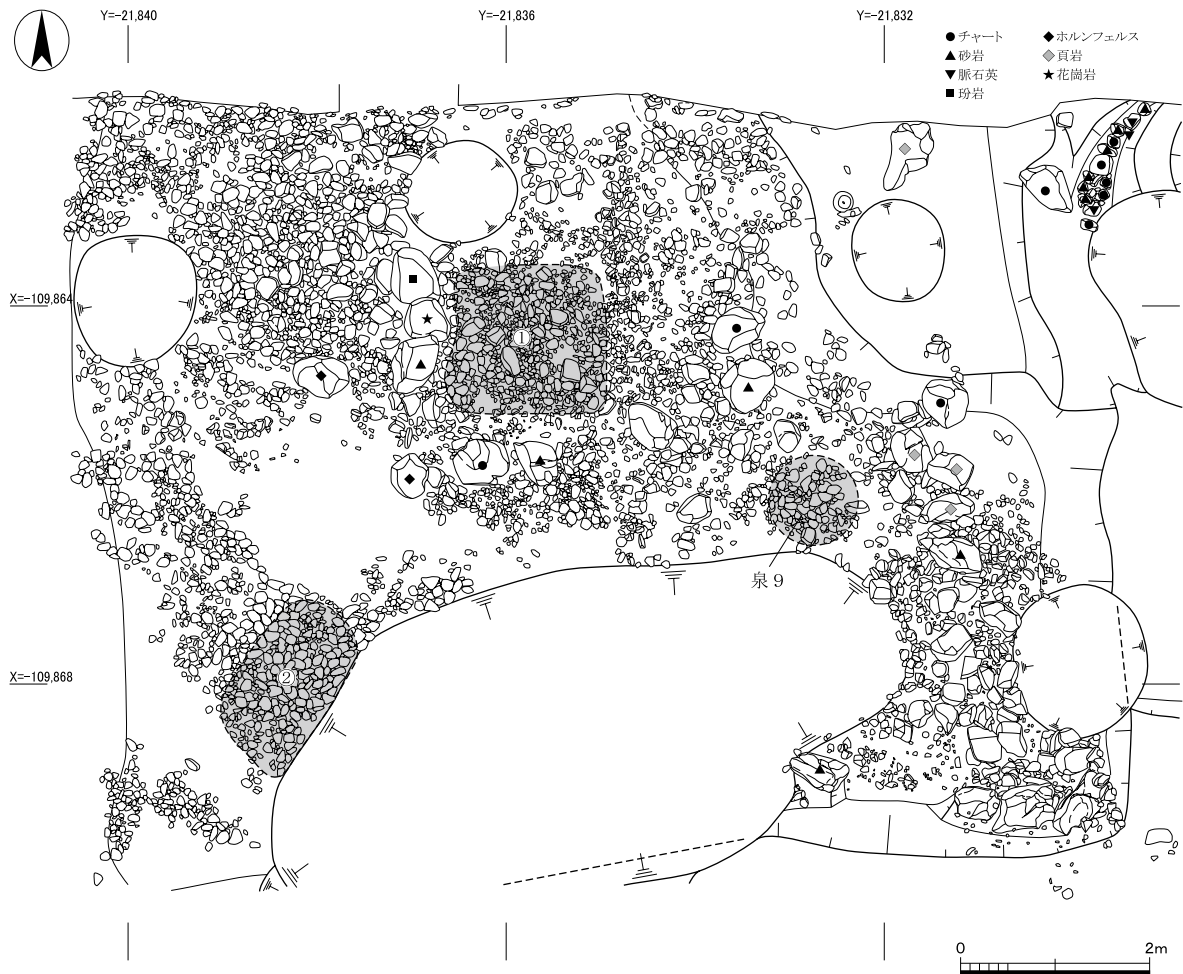


図29 遣水201・景石の石材（1：80）

あった。遣水201に用いられた石材は、砂岩6、チャート6、脈石英3であった。泉9は、ホルンフェルス8、砂岩6、チャート5、花崗閃緑岩2であった。景石に用いられた石材は、砂岩5、頁岩4、チャート3、ホルンフェルス2、玢岩1、花崗岩1であった。石敷き①は、砂岩11、チャート8、ホルンフェルス4、花崗岩2、玢岩1、アプライト1であった。石敷き②は、砂岩9、チャート1、アプライト1、ホルンフェルス1、斑礫岩1であった。

滝200・滝組基部や遣水201、景石については、砂岩、チャート、ホルンフェルスの使用が多かったが、これは泉9や石敷き①・②でも同様であった。

池876は、拳大の石材を用いた石敷きだけでなく、長径90cmを超す滝組の鏡石にも自然石を利用している。池876に利用された石材は、チャートや砂岩、ホルンフェルスなどの丹波帯に分布する岩石を多く用いている。とくにホルンフェルスが多く、池築造時或いはそれ以前の高野川の系統と考えられる。また基盤層にも礫が多く含まれるが、これらの礫にもホルンフェルスやアプライトなどの高野川系統の礫が多い。池の石敷きに用いられた小さな石材は、円磨度も高く角の取れた石材が多いことから、基盤層に含まれていた礫を利用したとみられる。一方で滝200や景石などに用いられた大きな石は、円磨度が低く角張っていることから、高野川支流の谷の斜面などから採取してきたとみられる。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要 (表4)

今回の調査では、遺物整理コンテナ10箱分の遺物が出土した。内訳は土器・瓦類が6箱、骨・木・金属製品などその他の遺物が1箱である。

今回の報告では、今年度調査の出土遺物とともに、1991年度に検出した室町時代の遺構（池876、堀708、堀758、堀833）からの出土遺物も合わせて報告する。出土遺物の時期については、平安京・京都Ⅰ期～XIV期の編年案¹⁾を準用した。

(2) 土器類

池876-2造成土出土土器（図30、図版7） 池876-2造成土は、池876-1から池876-2へ作り替える際に、池西岸に積んだ土である。池876-2造成土からは土師器・須恵器・瓦質土器・焼締陶器・瓦が出土した。出土土器の様相から、池876-1から池876-2への改修は京都Ⅷ期新段階に行ったとみられる。

1～5は土師器皿S。口径11.7～16.7cm、器高3.4～4.7cm。

枅状遺構204出土土器（図30） 滝前面の枅状遺構の掘形から土師器が出土した。

6は土師器皿S。口径12.3cm。灰白色を呈する。

泉9出土土器（図30） 泉9に据えられた木枠内部から土師器が出土した。京都Ⅷ期新段階でもやや新しい様相を呈す。7～10は土師器皿S。口径11.4～12.2cm、器高2.5～3.4cm。にぶい橙色～浅黄橙色を呈する。

陸部202出土土器（図30、巻頭図版4） 11は青磁牡丹唐草文深鉢。龍泉窯産。元代の所産。口径20.4cm、高さ15.3cm。胴が張る、太鼓胴とよばれる形式。胴部に牡丹唐草文を貼り付ける、浮牡丹手である。牡丹唐草文の上下には播座をつける。焼成後、底部中央に孔を穿っており、植木鉢として使用したとみられる。陸部の西辺に埋設されていた。

表4 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
室町時代	土師器、須恵器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、骨製品、木製品、金属製品		土師器10点、瓦質土器3点、軒丸瓦3点、軒平瓦2点 : 18点（1箱）		
			1991年度調査出土 土師器44点、瓦質土器3点、施釉陶器4点、焼締陶器1点、輸入陶磁器13点、軒丸瓦21点、軒平瓦20点、石製品1点、骨製品1点 : 108点（5箱）		
合 計		15箱	126点（6箱）	1箱	8箱

※ コンテナ箱数は、Aランクに1991年度調査出土分（5箱）が含まれる。

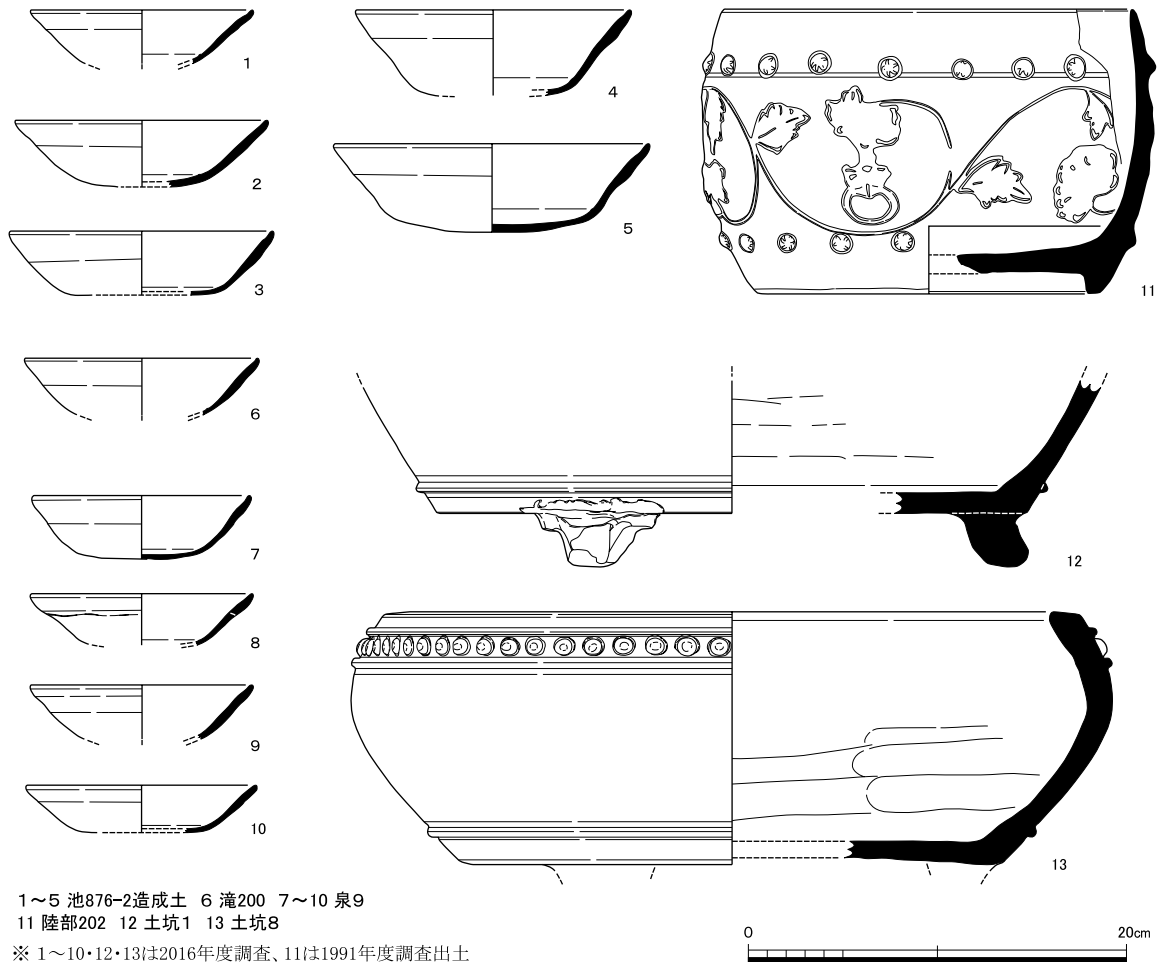


図30 池876-2造成土、滝200、泉9、陸部202、土坑1・8出土土器実測図（1：4）

土坑1出土土器（図30、図版7） 12は瓦質土器の火鉢。体部の下部に突帯を1条貼り付ける。底部に高さ2.8cmの脚がつく。外面は縦方向のミガキ、内面にはナデを施す。

土坑8出土土器（図30、図版7） 13は瓦質土器の火鉢。肩部に突帯を2条、胴下部に1条貼り付ける。肩部の2条の突帯の間に、珠文を巡らせる。底部には脚部の剥離した痕跡がある。

池876出土土器類（図31～33、巻頭図版3、図版7・8） 池876の埋土は上層、中層、下層の3層に分けた。池の埋め戻しの際に、礫を敷き詰めた層を中層とし、中層より上を上層、下を下層とした。池876からは土師器・焼締陶器・瓦質土器・施釉陶器・輸入陶磁器・瓦・土製品・木製品が出土した。基本的には上層では京都X期、中層では京都IX期古～中段階、下層では京都IX期古段階に属する土器が出土した。

下層 14～17は土師器皿Sh。口径6.4～6.8cm、器高1.7～2.2cmである。16の口縁部に一部煤が付着する。18は土師器皿N。口径9.6cm、器高2.0cm。底部内面に圈線が巡る。口縁部全体に煤が付着する。19～22は土師器皿S。口径11.7～15.5cm、器高3.0～3.8cmである。浅黄橙色～灰白色を呈する。

23は天目茶碗。口縁部の一部を欠くのみではほぼ完形である。口径12.6cm、器高7.2cm。美濃産。内面及び外面の口縁部から体部下半にかけて鉄釉が施される。高台は平底で縁を面取りする。

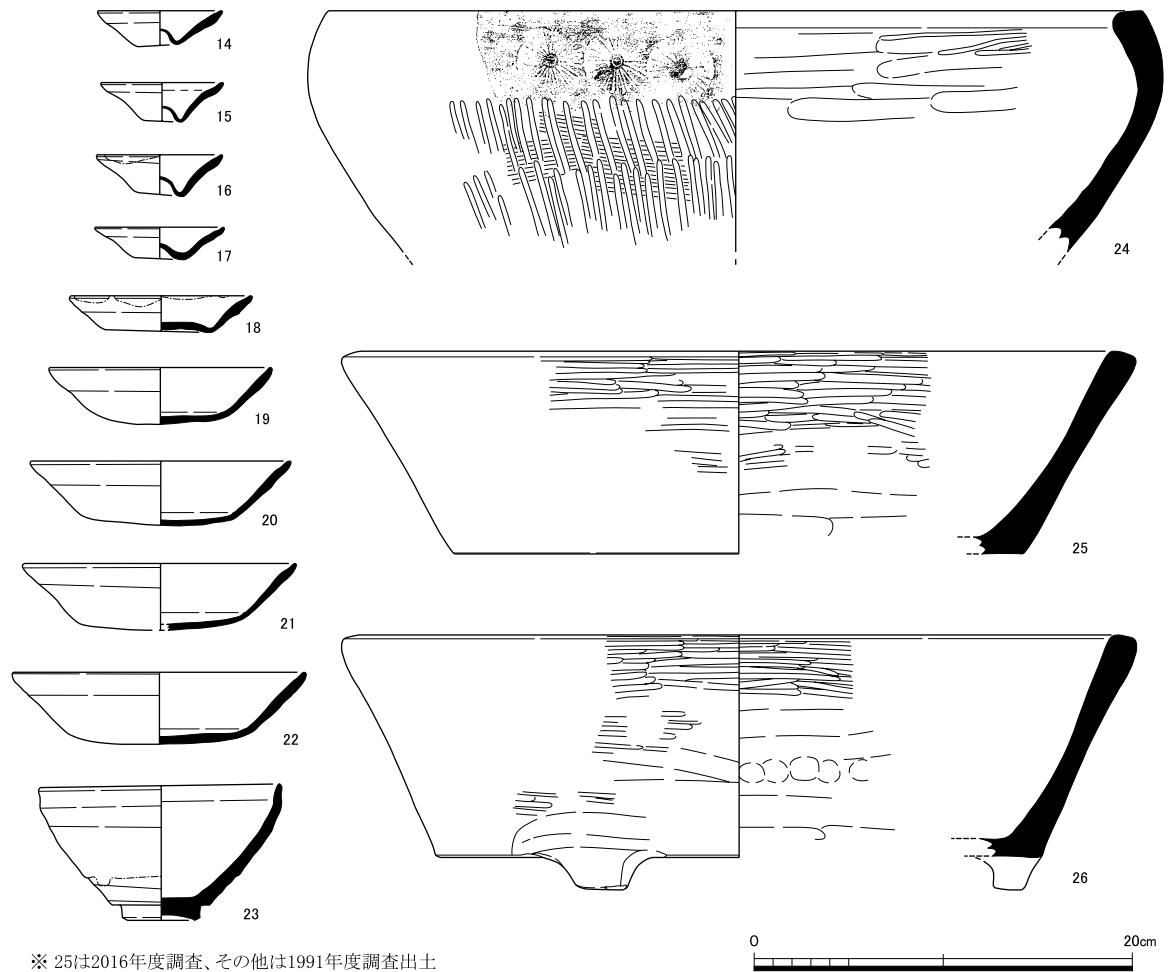


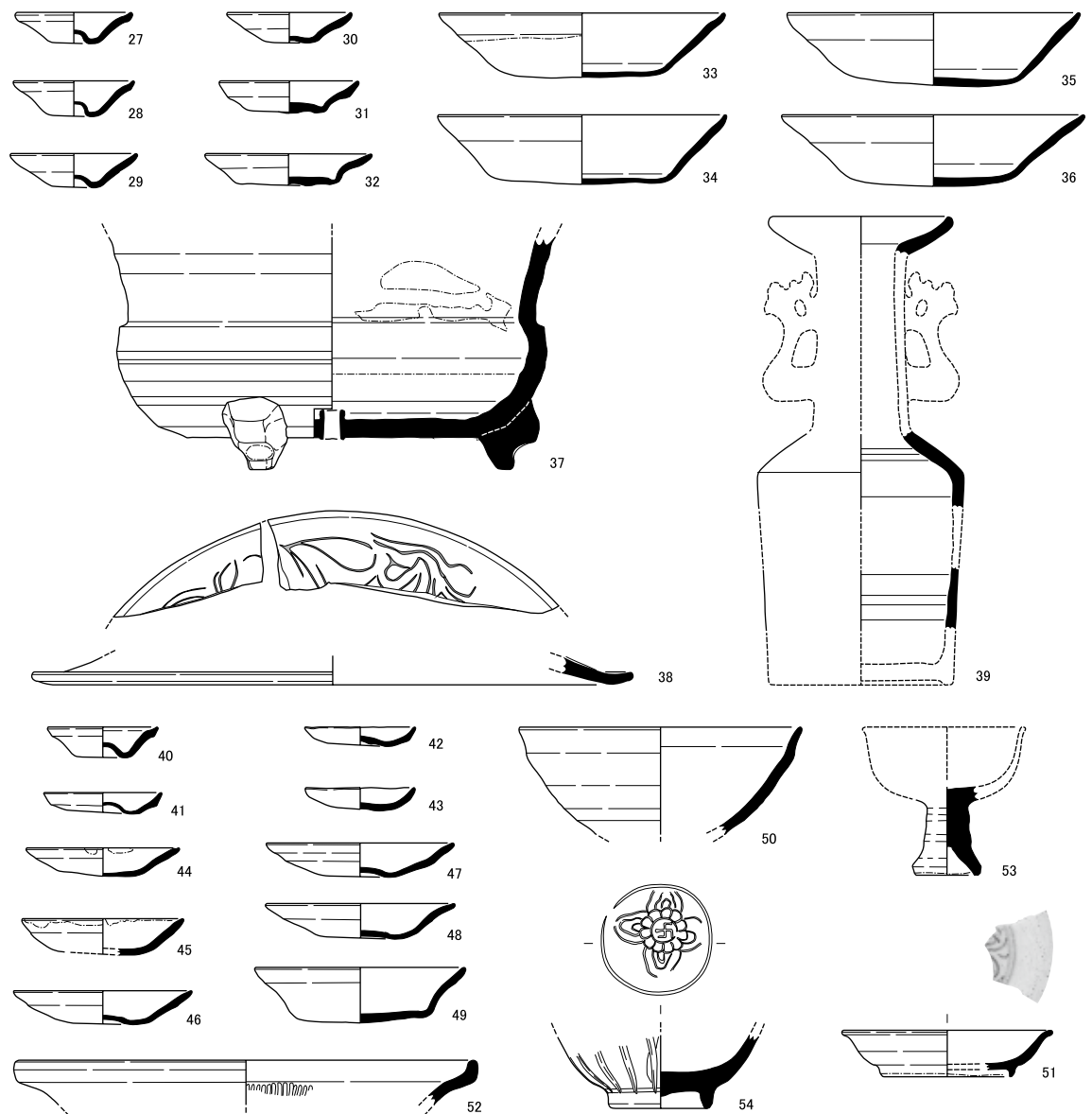
図31 池876埋土下層出土土器実測図（1：4）

24は瓦質土器火鉢。口縁部は内湾し、端部には平らな面をつくる。内面にはナデ、口縁部にのみミガキを施す。胴部外面はハケの後ミガキを施す。口縁部外面にはミガキの後、花文を3箇所を押捺する。25は瓦質土器火鉢。器高10.7cm。内外面ともにナデの後、口縁部から胴部上部にかけて横方向のミガキを施す。26は瓦質土器火鉢。器高13.5cm。内外面ともにナデ調整を施し、口縁部内面は横方向の密なミガキ、外面も全体にミガキがみられる。底部に短い脚がつく。

中層 27～30は土師器皿Sh。口径6.7～7.0cm、器高1.7～2.0cmである。浅黄橙～灰白色を呈す。31・32は土師器皿N。にぶい黄橙色を呈す。口縁が大きくひらき、底部内面にナデによる深い圈線がみられる。31は口径7.7cm、器高1.8cm、32は土師器皿N。口径9.3cm、器高1.8cmである。33～36は土師器皿S。口径15.9～16.9cm、器高3.7～4.2cmである。浅黄橙色～灰白色を呈す。

37は古瀬戸の脚付鉢。胴部に段がつき、胴下部は張る。内外面ともに底部より上部に施釉するが、底部には自然釉がみられる。底部には獣脚がつき、底部中央には焼成前に円孔を穿つ。植木鉢として利用したとみられる。

38は青磁の酒会壺蓋。中国産。外面と内面の口縁端部に施釉する。外面には文様（草花文か）が描かれる。39は青磁耳瓶。龍泉窯産。耳瓶の口縁部、肩部、胴部の破片が出土した。胎土や色調などから、同一個体と考えられる。耳部は欠くが、図では鳳凰に復元した。



※ すべて1991年度調査出土

27～39 池876埋土中層 40～54 池876埋土上層



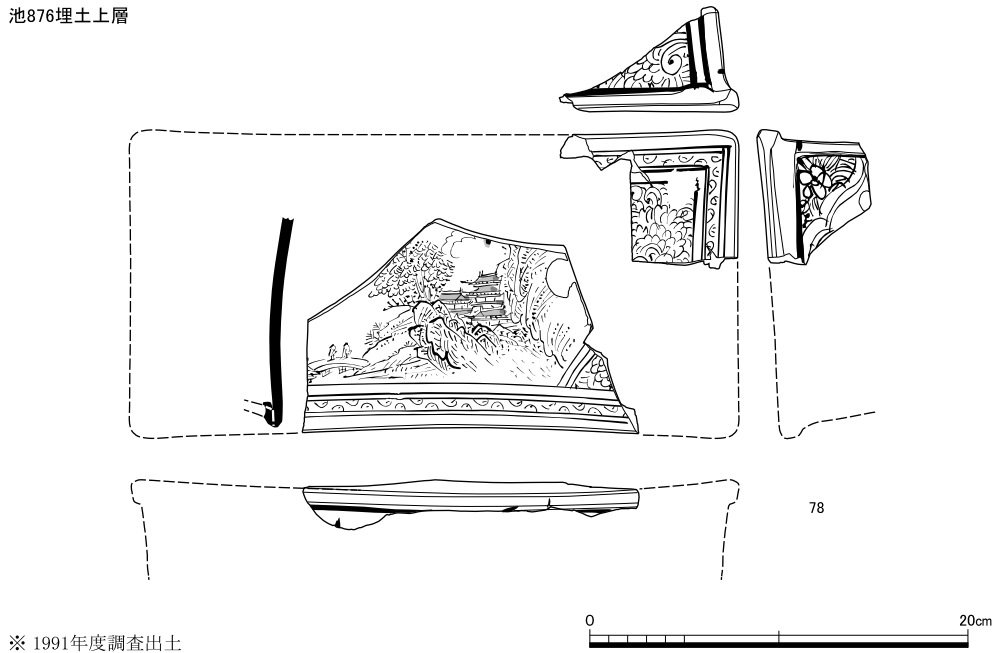
図32 池876埋土中層・上層出土土器実測図（1：4）

上層 40は土師器皿Sh。口径6.2cm、器高1.7cm。灰白色を呈する。41は土師器皿Nr。口径6.6cm、器高1.2cmの小型。にぶい黄橙色を呈する。42・43は土師器皿N。口径6.1cm、器高1.3～1.7cmである。44～49は土師器皿S。44・45は小（口径8.5～9.0cm、器高1.6～2.5cm）、46は中（口径10.0cm、器高1.9cm）、47～49は大（口径10.5～11.7cm、器高1.9～3.1cm）に分けられる。44には口縁の一部、45には口縁全体に煤が付着する。47には内面底部から口縁部にかけて煤が付着する。46～48は底部内面にナデによる圏線がみられる。

50は古瀬戸の平椀。内面及び外面の口縁部から腰にかけて施釉される。

51は白磁皿。中国産。底部内面に2重の圏線がめぐり、その内部に文様が描かれる。

52は青磁盤。口縁部が「く」字状に屈曲する。内面にヘラによるキザミ目が入る。53は青磁の馬上杯の脚部。中国産。内外面を施釉するが、高台端面は削り取る。54は青磁蓮弁文椀。中国産。



※ 1991年度調査出土

図33 白地鉄絵山水図枕実測図（1：4）

外面に幅の広い蓮花を彫る。内外面ともに施釉するが高台端面と底部外面は削り取る。底部内面に花文を押捺する。花文の中心には卍文を置く。

78は白地鉄絵山水図枕。元代、14世紀の所産。磁州窯産。大きさは、類例などから、高さ約14cm、幅約32cm、奥行約16cmと推測する。上面や短側面にある稜花形の窓の内部に、楼閣や橋を渡る人物像などの山水画を描き、窓の周囲に花文を配す。前側面には竹の葉が、後側面には花文が描かれている（巻頭図版3）。

堀708出土土器（図34、図版9） 堀708からは土師器・焼締陶器・瓦質土器・施釉陶器・輸入陶磁器・瓦・木製品が出土した。出土土器の時期は京都Ⅸ期中段階頃からⅩ期である。

55は土師器皿Sh。口縁部は外反し、端部を上方につまみ上げる。56は土師器皿N。口径12.0cm、器高2.25cm。橙色を呈する。57～61は土師器皿S。57・58は口径13.9～18.5cm、器高2.7cm。59～61は口径10.6cm、器高1.9cmの中（59）と、口径12.6～13cm、器高2.0～2.1cmの大（60・61）に分けることができる。59・60は口縁部に煤が付着する。また60の底部内面にはナデによる圏線がみられる。

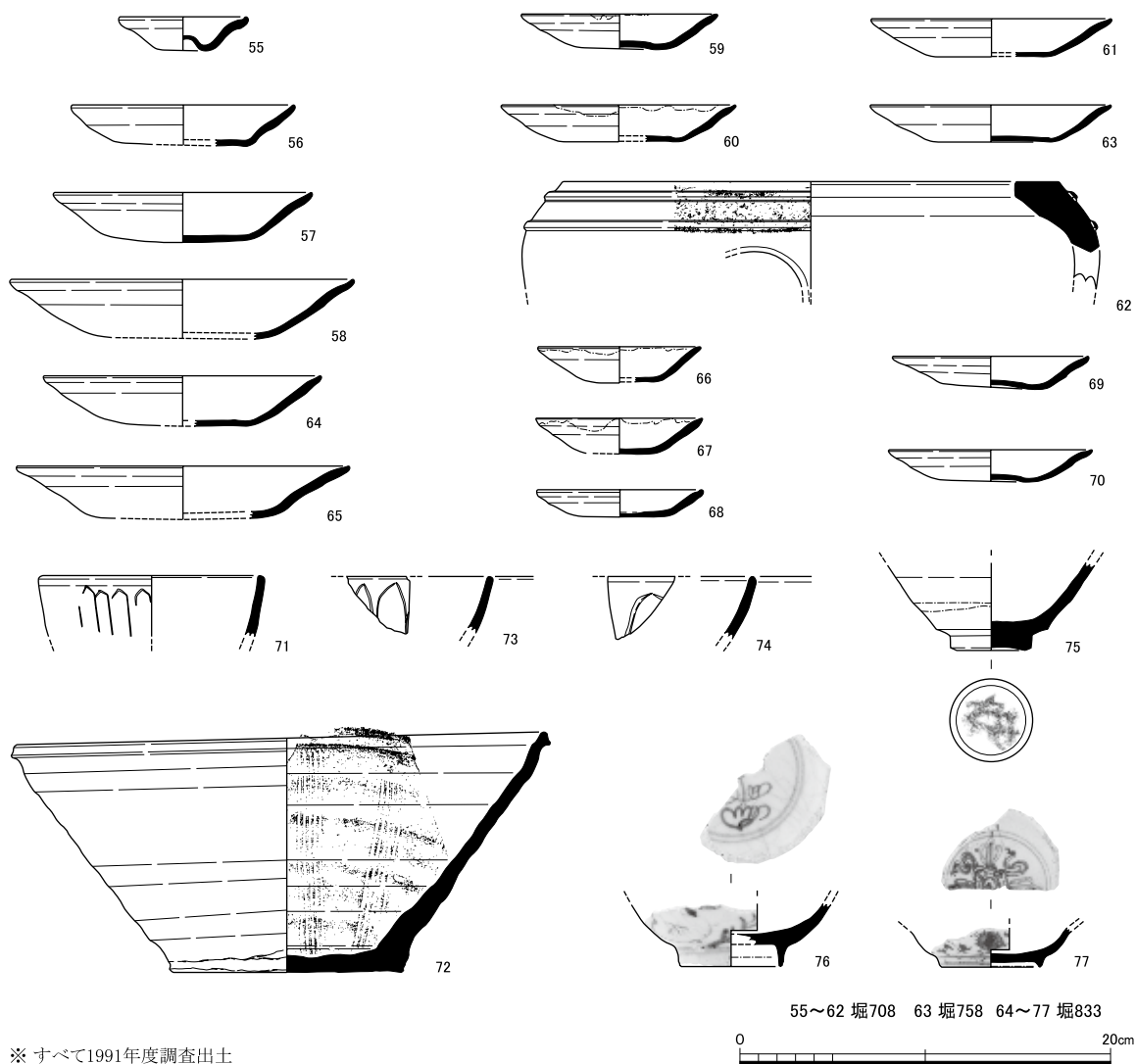
62は瓦質土器の風炉。口縁部の2条の突帯の間にスタンプ花菱文を押捺する。体部に円形の火窓を穿つ。55～58・62は京都Ⅸ期、59～61は京都Ⅹ期の様相を呈す。

堀758出土土器（図34、図版9） 堀758からは土師器・瓦質土器・輸入陶磁器が出土した。遺物の出土量は少ないが、出土土器の時期は京都Ⅹ期である。

63は土師器皿S。口径13.0cm、器高2.0cm。灰白色を呈する。

堀833出土土器（図34、図版9） 堀833からは土師器・焼締陶器・瓦質土器・施釉陶器・輸入陶磁器・瓦・木製品が出土した。出土土器の時期は京都Ⅸ期中段階頃からⅩ期である。

64～70は土師器皿S。64・65は京都Ⅸ期、66～70は京都Ⅹ期の様相を呈する。64は口径15.0cm、



※ すべて1991年度調査出土

図34 堀708・758・833出土土器実測図（1：4）

器高2.7cm、65は口径17.9cm、器高2.8cmである。66～70は、口径8.8～9.0cm、器高1.45～1.95cmの小（66～68）、口径10.6cm～11cm、器高1.75～1.8cmの大（69・70）に分けることができる。66・67は口縁部に煤が付着する。64は浅黄橙色、65～70は灰白色を呈する。

71は施釉陶器の蓮花文碗。瀬戸美濃産。外面に幅の狭い蓮花文の線刻を施す。

72は焼締陶器の播鉢。口径28.4cm、器高13.0cmである。内面には使用による摩耗がみられる。

73・74は青磁の蓮花文碗。中国産。外面に蓮弁を彫る。

75は天目茶碗で、内面及び外面の体部下半にかけて鉄釉が施される。中国産。高台は平底で縁を面取りする。底部には墨書が残存するが、詳細は不明である。

76・77は青花皿。中国産。底部内面には2重の圈線とその内部に花文が描かれる。外面にも草花文が描かれ、高台に2重の圈線がめぐる。

(3) 瓦類

軒丸瓦 (図35・36、図版10)

瓦1・2は平安時代後期、瓦3～24は平安時代後期から鎌倉時代とみられる。

瓦1は複弁9弁蓮華文。凹中房、連子は1+8で、外区はない。堀708から出土した。

瓦2は単弁蓮華文。外区に界線・珠文・圏線。蓮弁は棒状。高倉宮・曇華院跡³⁾の第64図－9と同文。池876埋土上層から出土した。

瓦3は複弁蓮華文。凹中房で、外区はない。池876埋土中層から出土した。瓦4は複弁4弁蓮華文。小型瓦。凸中房で、中房に卍を配す。外区に珠文と圏線がめぐる。池876埋土中層から出土した。瓦5は複弁蓮華文。小型瓦。凸中房で、外区には珠文と圏線がめぐる。瓦4と同文とみられる。池876-2の造成土から出土した。瓦6は複弁蓮華文。小型瓦。凸中房で、外区には珠文と圏線がめぐる。瓦4と同文とみられる。池876埋土下層から出土した。

瓦7は単弁蓮華文。小型瓦。凸中房で、外区には珠文と圏線がめぐる。瓦4と同文とみられる。瓦当裏面に浅い溝を付けて、丸瓦を挿入していた。池876埋土中層から出土した。瓦8は単弁蓮華文。外区に界線がめぐる。池876埋土上層から出土した。瓦9は単弁蓮華文。瓦当裏面に浅い溝を付けて、丸瓦を挿入していた。堀833から出土した。

瓦10は右卷三巴文。巴の頭・尾は離れる。瓦当裏面に浅い溝を付けて、丸瓦を挿入していた。池876埋土下層から出土した。瓦11は右卷三巴文。巴の頭・尾は離れる。池876埋土下層から出土した。瓦12は右卷三巴文。巴の頭は離れる。瓦当裏面に浅い溝を付けて、丸瓦を挿入していた。堀833から出土した。瓦13は右卷三巴文。巴の頭は離れる。池876埋土上層から出土した。瓦14は右卷三巴文。巴の頭は離れる。池876埋土上層から出土した。瓦15は右卷三巴文。巴の頭・尾は離れる。池876埋土中層から出土した。瓦16は右卷巴文。巴の頭は離れる。堀833から出土した。瓦17は右卷巴文。巴の頭・尾は離れる。池876埋土中層から出土した。瓦18は右卷巴文。巴の頭は離れる。堀708から出土した。瓦19は左卷三巴文。巴の頭は接し、尾は離れる。堀708から出土した。瓦20は左卷三巴文。巴の頭・尾は離れる。池876埋土中層から出土した。瓦21は左卷巴文。巴の頭は離れる。池876埋土下層から出土した。

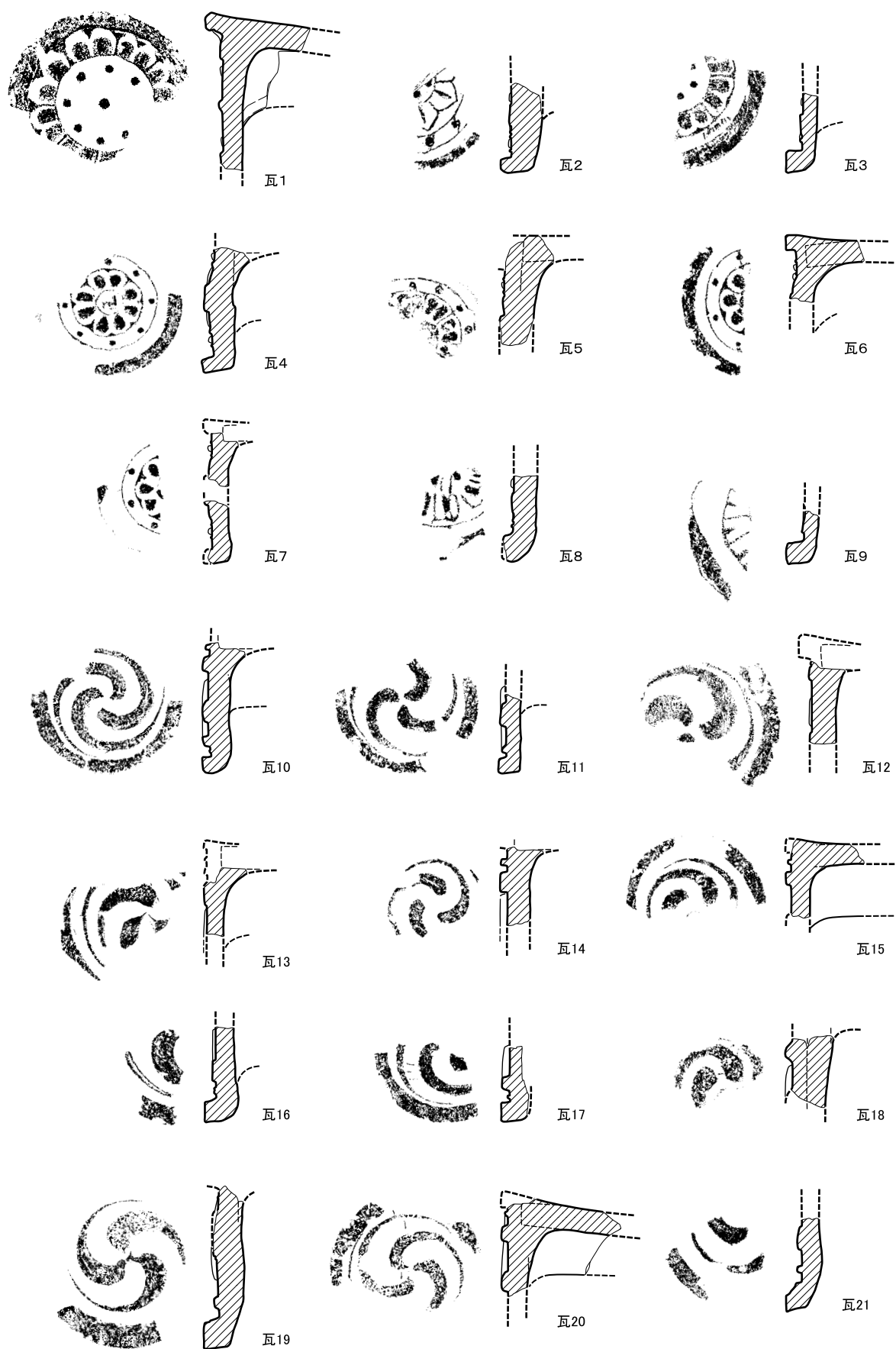
瓦22は右卷三巴文。巴の頭は離れる。外区に珠文がめぐる。瓦当裏面に浅い溝を付けて、丸瓦を挿入していた。池876埋土上層から出土した。瓦23は左卷巴文。外区に珠文がめぐる瓦当裏面に浅い溝を付けて、丸瓦を挿入していた。池876埋土中層から出土した。

瓦24は梵字文。出土層位は不明である。

軒平瓦 (図36、図版10)

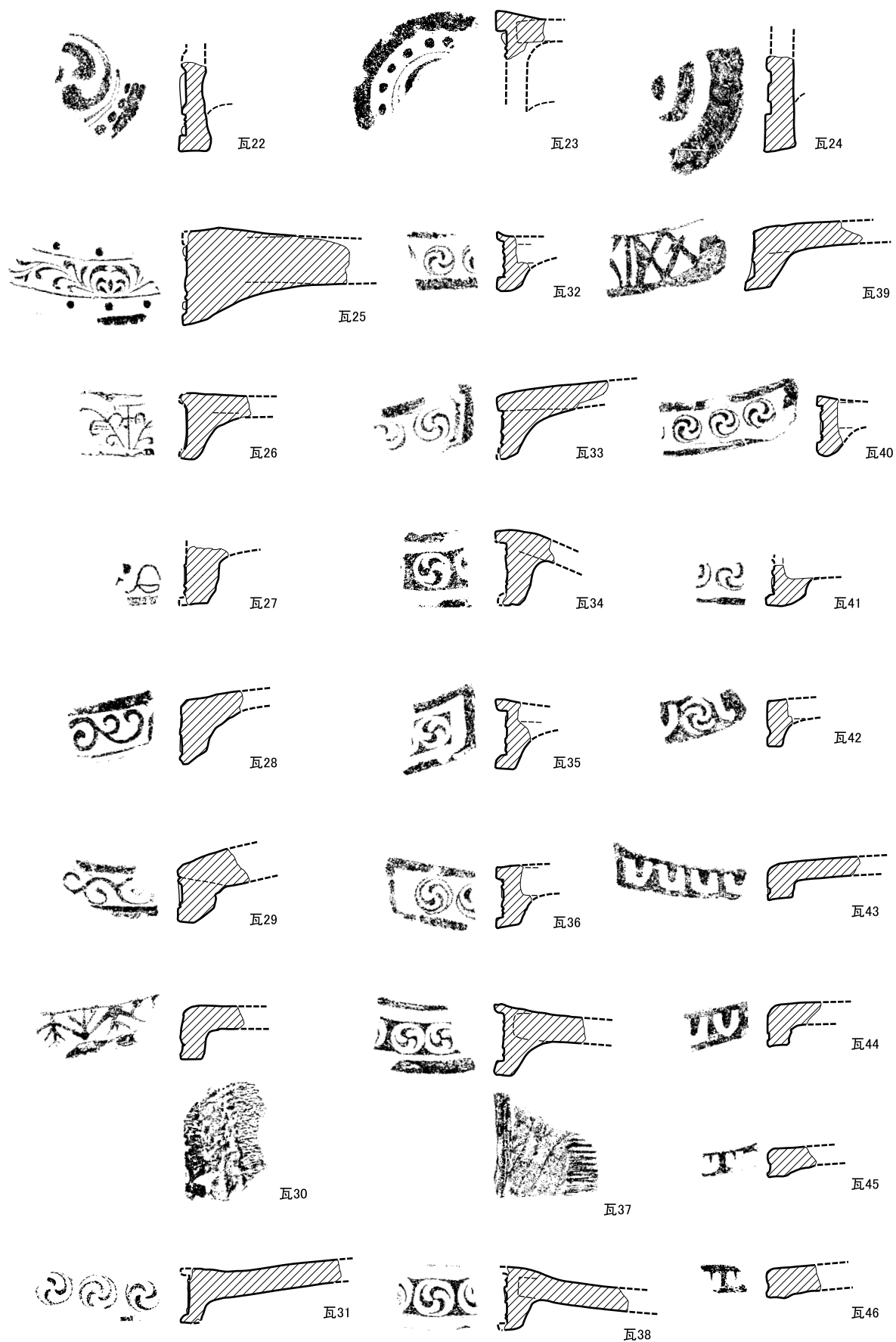
瓦25は平安時代前期、瓦26～39は平安時代後期から末期、瓦40～46は鎌倉時代とみられる。

瓦25は均整唐草文。外区に珠文がめぐる。曲線顎、顎貼り付け技法。堀905から出土した。瓦26は外行唐草文。外区なし。段顎、顎貼り付け技法。池876埋土中層から出土した。瓦27は外行唐草文。楕円形を中心飾りとする。段顎、顎貼り付け技法。山城産。三条西殿跡⁴⁾の第117図－1と同文。



※ 瓦5・21は2016年度調査、その他は1991年度調査出土

図35 軒丸瓦拓影及び実測図 (1 : 4)



※ 瓦24・33・46は2016年度調査、その他は1991年度調査出土

図36 軒丸瓦・軒平瓦拓影及び実測図（1：4）

池876埋土上層から出土した。瓦28は外行または右偏行唐草文。外区はない。段顎、顎貼り付け技法。池876埋土下層から出土した。瓦29は外行または左偏行唐草文。外区はない。段顎、顎貼り付け技法。堀833から出土した。瓦30は唐草文か。山城産。完全折り曲げ技法。文様面に布目が残存する。池876埋土中層から出土した。

瓦31は連巴文。右卷三巴文。巴の頭は離れ、尾は接して界線となる。段顎、顎貼り付け技法。堀833から出土した。瓦32は連巴文。右卷三巴文。巴の頭は離れ、尾は接して界線となる。段顎、顎貼り付け技法。堀708から出土した。瓦33は連巴文。左卷三巴文。巴の頭・尾は離れる。段顎、顎貼り付け技法。池876造成土から出土した。瓦34は連巴文。左卷三巴文。巴の頭は接し、尾は離れる。段顎、顎貼り付け技法。堀833から出土した。瓦35は連巴文。左卷三巴文。巴の頭は接し、尾は離れる。段顎、顎貼り付け技法。堀708から出土した。瓦36は連巴文。左卷三巴文。巴の頭・尾は離れる。段顎、顎貼り付け技法。堀708から出土した。瓦37は連巴文。播磨産か。左卷三巴文で、巴の頭は接し、尾は離れる。段顎、顎貼り付け技法。平瓦凸面に平行叩き。池876埋土下層から出土した。瓦38は連巴文。播磨産。左卷三巴文で、巴の頭は接し、尾は離れる。段顎、顎貼り付け技法。池876埋土下層から出土した。

瓦39は幾何学文。段顎、顎貼り付け技法。斜格子文と縦線を組み合わせた文様で、高倉宮⁵⁾の第40図-5と同文。池876埋土上層から出土した。

瓦40は連巴文。右卷三巴文で、巴の頭は離れ、尾は接して界線となる。顎貼り付け技法。堀758から出土した。瓦41は連巴文。播磨産。右卷三巴文で、巴の頭は離れ、尾は接して界線となる。曲線顎、顎貼り付け技法。堀833から出土した。

瓦42は剣巴文。剣頭文は陰刻、巴文は陰刻の右卷三巴で、巴の頭は離れ、尾は接して界線となる。段顎、顎貼り付け技法。堀833から出土した。

瓦43は陰刻剣頭文。剣頭文の配置は垂直。段顎、完全折り曲げ技法。池876埋土下層から出土した。瓦44は陰刻剣頭文。剣頭文の配置は垂直。段顎、折り曲げ技法。瓦当裏面と平瓦境に凹型台圧痕が認められる。文様面に布目が残存する。池876埋土中層から出土した。瓦45は陰刻剣頭文。剣頭文の配置は垂直。段顎、折り曲げ技法。文様面に布目が残存する。堀708から出土した。瓦46は陰刻剣頭文。剣頭文の配置は垂直。段顎、折り曲げ技法。文様面に布目が残存する。池876-2造成土から出土した。

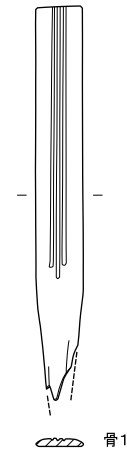
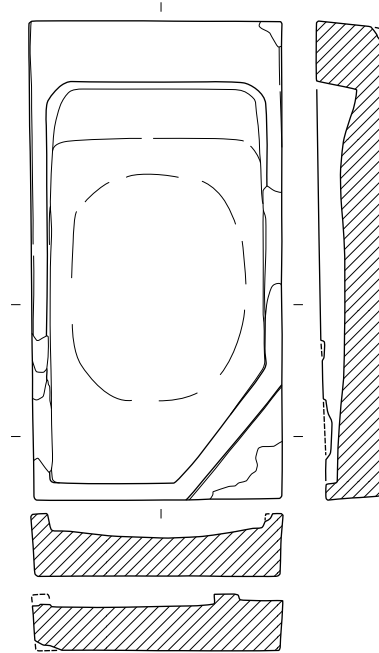
(4) その他の遺物 (図37、図版9)

石1は石製の硯。長さ12.7cm、幅6.7cm、厚さ1.8cm、重さ281.6g。底面には工具の痕跡が粗く残存する。陸部の中央は凹んでおり、全体的に墨が付着している。池876埋土上層から出土した。

骨1は鹿角製の筭。残存長10.4cm、最大幅1.3cm、厚さ0.2cm。上部の幅が広く、下部の先端に向かって幅が徐々に細くなる。上部の表面に3条の沈線がみられる。池876埋土下層から出土した。

池876埋土上層

池876埋土下層



石1



※ いずれも1991年度調査出土

図37 石製品・骨製品実測図（1：2）

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080～90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580～90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV
古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中	古中
新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新

- 2) 「96 白地鉄絵 山水図長方形枕」『特別展 白と黒の競演－中国・磁州窯系陶器の世界－』大阪市立美術館 2002年
- 3) 『平安京左京三条四坊四町 京都市中央区曇華院前ノ町』京都文化博物館（仮称）調査研究報告 第2集 財団法人京都文化財団 1988年
- 4) 『三條西殿跡』平安京跡研究調査報告 第7輯 財団法人古代学協会 1983年
- 5) 『平安京高倉宮・曇華院跡』平安京跡研究調査報告 第8輯 財団法人古代学協会 1983年

5. ま と め

(1) 室町時代の調査地 (図38)

各遺構の出土土器から、池876の造営と埋没の時期を検討する。また1991年度に検出した池と同時代の遺構とみられる堀との関係についても検討する。

出土土器の様相より、池876-1から池876-2への改修時期は15世紀前葉と判断できる。このことから、池876-1の造成は15世紀初頭もしくは14世紀代に遡るとみられる。改修後の池876-2

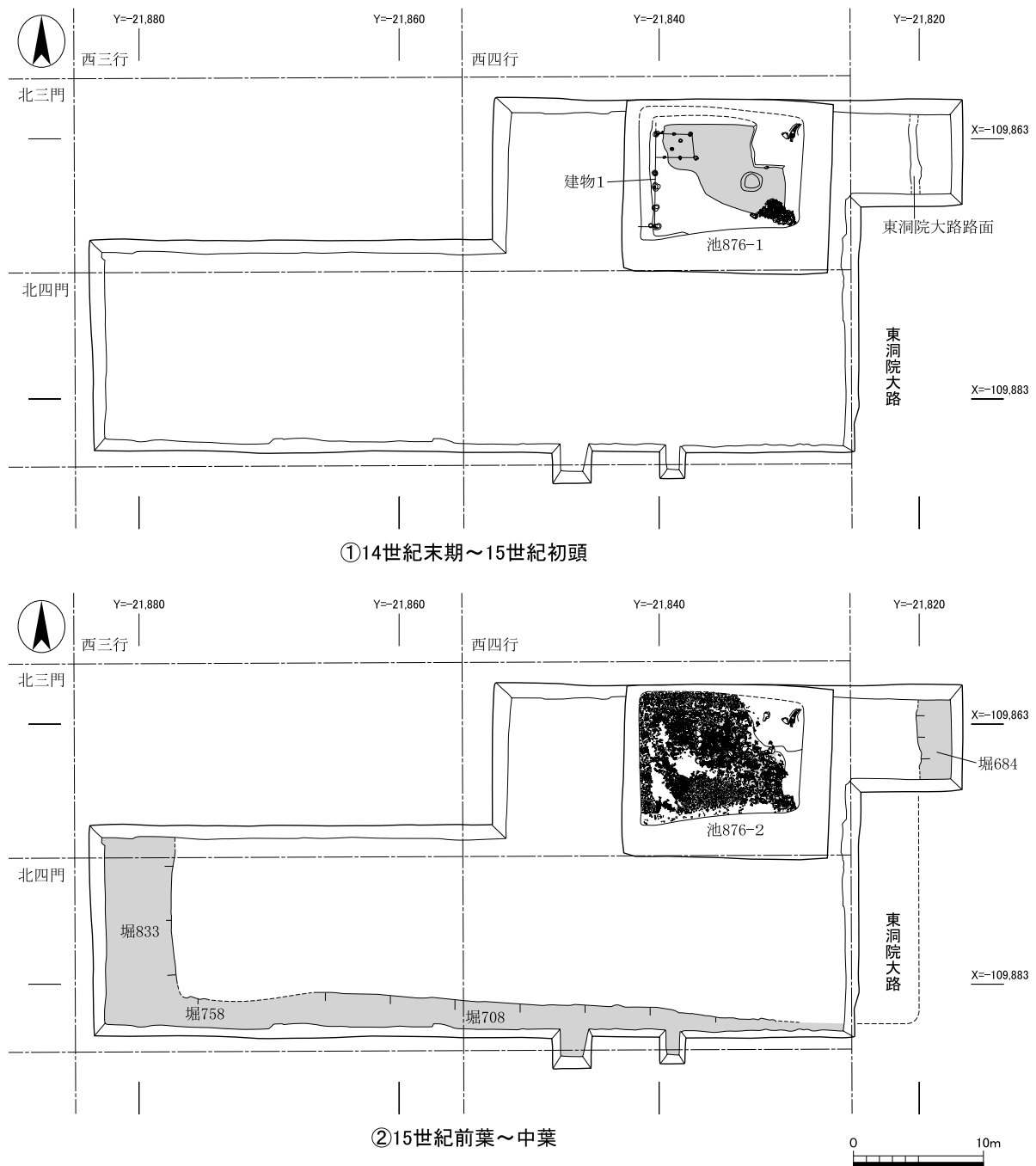


図38 四行八門の想定線と調査区の位置 (1 : 500)

は、15世紀中葉には埋没が始まった。池の大半が埋まった15世紀後葉には、池を最終的に埋め立てるために拳大の礫が用いられた。そして、16世紀中葉には残っていた窪みを埋める整地がなされた。

堀708、堀833はともに16世紀中葉にはほぼ埋没したことが、出土土器から明らかである。なお、堀758は後世の攪乱で分断されているものの、堀708に接続する同一の堀と推測する。これらの堀の開削は15世紀前葉から15世紀中葉頃とみられる。また堀758と堀833はそれぞれ1町のほぼ中央に位置しており、調査区東側で検出した堀684と合わせて、これらの堀は邸宅の周囲を囲む堀の一部であることが、1991年度の調査時に指摘されている。

中世都市京都では、応仁の乱前後に防御施設として、武家や公家が邸宅の周囲に堀を、町組が構を構築しており、1991年度調査で検出した堀もその一例と考えられる。調査地周辺は1467年から約10年間続いた応仁の乱により被災したことが明らかとなっている。この応仁の乱により、池876や堀708、堀833などの邸宅に関わる施設は廃絶し、16世紀中庸に整地を行ったのだろう。

(2) 池876の変遷 (図39)

今回の調査により、池876には新旧2段階が存在することが確認できた。この池876の古段階から新段階、さらに埋没までの変遷について述べる。

古段階の池876-1は、方形を呈する池で、南東隅には技巧を凝らした滝組が作られ、北東隅には方形に張り出した陸部が設けられる。陸部には遣水状の意匠が施され、池の中央やや東寄りには泉があり、そこからは水が滾々と湧き出て、池に水が供給されていたとみられる。西岸は、造作の多い池の東岸とは対照的に、3段の階段状に形成されており、岸上面には建物が建っていた。さらにこの建物には池に張り出す施設が附属していた。この附属施設は陸部と相対する位置にあり、また滝を正面に臨むことのできる位置でもある。陸部に設けられた遣水や滝を楽しむための建物であったことをうかがわせる。池876-1の水位については、池の西岸の下段平坦面（標高37.30m）には建物の東側柱が立っており、さらに石列が存在していることから、下段平坦面が水に浸かっていたとは考えにくい。このことから、池の水位は、下段平坦面

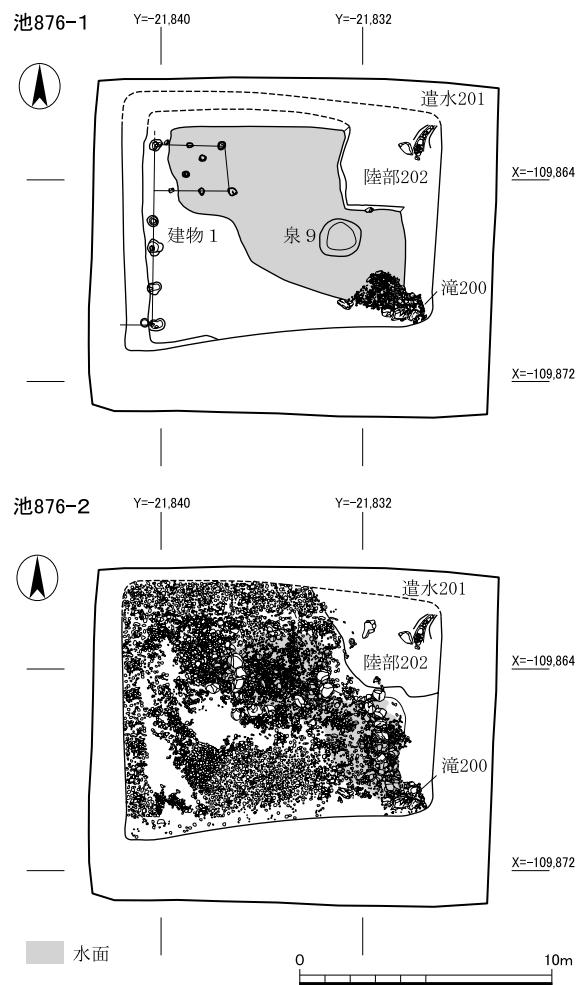


図39 池876の推定復元図 (1 : 300)

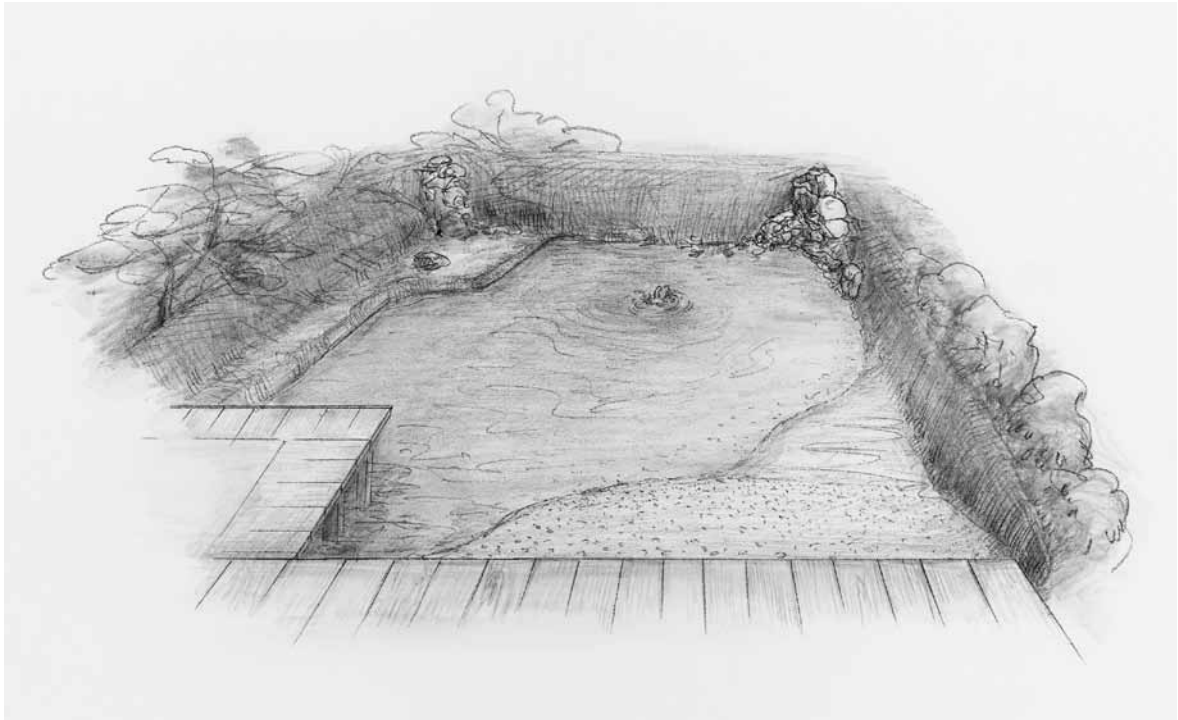


図40 池876-1復元イラスト

(イラスト／出水みゆき)

の標高である37.30mよりは低かったと推測できる。池底の標高が37.0～37.1mであることから、水深は深くても20cmほどであったとみられる。

池876-2への改修に伴い、建物は廃絶し、池の西岸の階段状の地形は埋められて、緩やかな傾斜をもつ岸へと姿を変えた。また池の西岸だけでなく、池の底面から滝組基部の石積みの高さまで、池全体に土を積み、その上に拳大の石を敷いている。さらに、池中にはいくつかの直線的に並ぶ景石が配置された。池北東部の陸部の形状は古段階の方形を呈するものから丸みを帯びたラインをもつものに改修される。陸部には白砂が敷かれ、青磁を用いた植木鉢には植物が植えられていたであろう。池876-2の水位は、古段階の池876-1とほぼ同じ高さであったと考えられる。仮に水面が標高37.20mであったとすると、陸部の西側の一部、泉周辺、滝前面の一部が水面下となるのみである。水面が標高37.25mであったとすると、滝前面から石106～108にかけてのほぼ全体が水面下となる。

これらのことから、池876の水位は37.25mほどとするのが妥当であろう。なお、図39の池876復元図の水位は標高37.25mとして図化した。

(3) 邸宅の居住者

池876の埋土からは、12～13世紀の輸入陶磁器が出土しており、これらは池876を埋め戻す際に廃棄した可能性が高い。これらの輸入陶磁器の中に含まれていた青磁耳瓶、陶枕、馬上杯、酒会壺蓋や陸部に配置された青磁鉢などは、希少性の高い一級品である。このことから、池876を備えた邸宅の家主は非常に富裕な階層の人物であったと推測できる。

本報告第2章第1節で述べたように、調査地周辺は、平安時代後期には御所や貴族の邸宅地、室

町時代前期には武家の邸宅地となった場所である。また、室町時代前半からは、商家も建ち並び始め、室町時代の後半になると商業地として栄えた状況がみてとれる。本調査地の西隣では周辺の小規模な商家とは一線を画す竹田家の邸宅が存在していたことも明らかとなっている。本調査地も、武家の邸宅地であった可能性は否定できないが、今回検出した池を有した邸宅は、室町時代後半に属することから、商業地として繁栄した周辺の状況を勘案すると、有力な商人の邸宅であった可能性も考えられる。

図 版



1 池876-2 再検出状況全景1（西から）



2 池876-2 再検出状況全景2（南東から）



1 池876-2 陸部202再検出状況（南東から）



2 池876-2 遺水201再検出状況（南東から）



3 池876-2 陸部202基礎構造（南西から）



1 池876-1 滝200・柵状遺構204（北西から）



2 池876-1 滝200 石30 断割断面（北から）



3 池876-1 滝200 石31 断割断面（西から）



1 池876-1 泉9完掘状況（北西から）



2 池876-1 泉9検出状況（西から）



3 池876-1 泉9半截状況（西から）



4 池876-1 建物1（南から）



5 池876-1 建物1 石列（北東から）



池876-2 全景（西から 1991年度調査）



1 池876-2 滝200 (北から 1991年度調査)



2 池876-2 陸部202 (北から 1991年度調査)



3 池876-2 埋鉢203 断割状況 (北西から 1991年度調査)







59



63



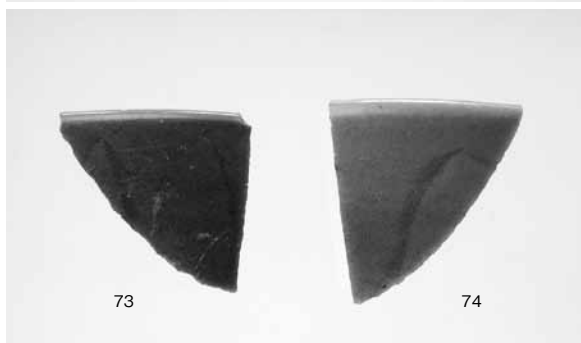
67



69



71



73

74



75



石1



骨1



瓦 1



瓦 4



瓦 10



瓦 19



瓦 25



瓦 26



瓦 30



瓦 39



瓦 43



瓦 40

報告書抄録

ふ り が な	へいあんきょうさきょうさんじょうさんぼうじゅうさんちょうあと・からすまおいけいせき							
書 名	平安京左京三条三坊十三町跡・烏丸御池遺跡							
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2 0 1 6 - 1 0							
編 著 者 名	松吉祐希							
編 集 機 関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発 行 所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発 行 年 月 日	西暦2017年 3 月31日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
へいあんきょうあと 平安京跡 からすまおいけいせき 烏丸御池遺跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 くるまやちょう 車屋町245-2他	26100	1 464	35度 00分 34秒	135度 45分 39秒	2016年 8 月 22日～2016 年10月14日	192㎡	(仮称)新 風館プロ ジェクト
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡 烏丸御池遺跡	都城跡 集落跡	室町時代	池、滝、岬、遣水、 泉、建物、土坑	土師器、須恵器、瓦質 土器、施釉陶器、焼締 陶器、輸入陶磁器、瓦、 骨製品、木製品、金属 製品		1991年度の調査で 検出した池に新旧 2 時期が存在する ことが明らかとな った。 古段階の池に伴う 建物を検出した。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-10

平安京左京三条三坊十三町跡・
烏丸御池遺跡

発行日 2017年3月31日

編集 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961